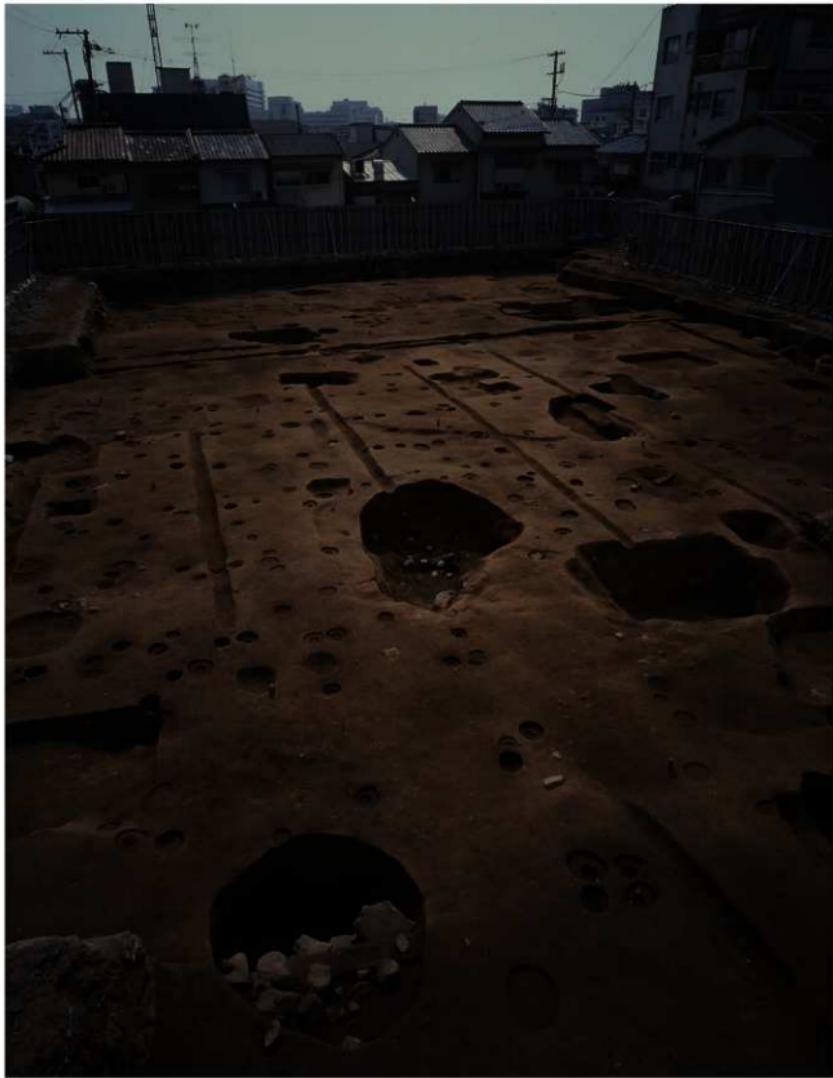


祇園遺跡第14次発掘調査報告書

2013年
神戸市教育委員会



遺構面全景（平安時代～中世）



右 SE02出土 青白磁合子
左 SD01出土 白磁水注



SD01出土遺物

祇園遺跡第14次発掘調査報告書

2013年
神戸市教育委員会

序

『山梶記』という平安時代の遺族の日記には今から840年ほど前の治承4(1169)年平清盛邸について「近年摂州平野の勝地を占め、遁世退老の幽居となす」と書かれています。

ここに登場する摂州平野とは、摂津国八部郡平野、現在の神戸市兵庫区平野地域のことをさしていると考えられます。清盛はこの平野に置かれた屋敷より、都の政治への指令をだす一方、すぐ南に位置し中国との貿易の拠点である大輪田泊の経営に力を注いだとされています。

祇園遺跡は、この平野の地、上祇園町・下祇園町一帯にひろがる遺跡で、まさに福原京の中核部にあたる場所といえます。

今回報告する祇園遺跡14次発掘調査は、平安時代末の福原京に関連する邸宅跡が確認されるなど周辺の歴史を考える上で貴重な成果がありました。

本書が地域の歴史を知っていただくための一助となり、文化財の保護に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって、実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区下祇園町5丁目において、平成23年度に発掘調査を実施した、祇園遺跡第14次調査の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は店舗建設に伴い神戸市教育委員会が実施したものである。
3. 現地での調査は、平成23年8月3日から同年11月18日までで神戸市教育委員会文化財課 内藤俊哉が担当した。現地調査終了後より平成24年度にかけて神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理および報告書の作成をおこなった。
4. 本書写真図版のうち現地での遺構写真是神戸市教育委員会 丸山 潔および調査担当者によるもので、航空写真是㈱島田組による。また遺物写真については杉本和樹（西大寺フォト）によるものである。
5. 本書の記述は第3章第2節SE02動物遺存体、第3節および第4節を中村大介が担当し、他の記述と全体の編集については、調査担当者がおこなった。また周辺の微地形図については、閑野 豊の作成による。
6. 本書第4章、出土木材の樹種同定については㈱古環境研究所に委託した。
7. 本書に使用した標高は東京湾平均海面（T.P.）を、方位座標については平面直角座標系第V系（世界測地系）を使用している。
8. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図「神戸主部」・「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1の地形図「鳥原」「夢野」「諷詠山」「神戸駅」を使用した。
9. 発掘調査で出土遺物および図面・写真等の記録類は、神戸市教育委員会において保管している。
10. 現地での発掘調査の実施ならびに本書の刊行については、㈱T S K、㈱トーホーストアおよび㈱島田組の多大な協力を得た。
11. 調査にあたり工楽善通氏（大阪府立狭山池博物館長）、鶴柄俊夫氏（同志社大学）、玉井哲雄氏（国立歴史民俗博物館）の現地指導を受けました。また、高橋昌明氏、元木泰雄氏、山田邦和氏には現地において貴重なご意見をいただきました。記して感謝いたします。

目　　次

第1章　はじめに.....	1
第1節　調査に至る経過と調査組織.....	1
第2節　遺跡の位置と歴史的環境.....	4
第2章　調査区の設定.....	7
第1節　調査区の設定.....	7
第3章　調査成果.....	8
第1節　基本層序.....	8
第2節　調査の概要.....	8
第3節　出土金属製品.....	34
第4節　SE02出土漆製品の保存科学的調査	35
第4章　自然科学分析.....	37
祇園遺跡第14次調査出土木材の樹種同定（株式会社 古環境研究所）	
第5章　まとめ.....	41
写真図版	

挿図目次

図1. 今回の調査地と周辺調査区	4
図2. 周辺遺跡図	5
図3. 祇園周辺微地形図	6
図4. 調査区設定図	7
図5. 調査区断面図	8
図6. 中世～平安時代後期 調査区平面図	9
図7. SB11平面・断面図	10
図8. 調査区北半部平面図	11
図9. SB12平面・断面図	12
図10. SB13平面・断面図	13
図11. 柵列1平面・断面図	13
図12. SD01平面・断面図	14
図13. SD01出土遺物	15
図14. SD09平面・断面図	16
図15. SD02～07断面図	16
図16. SE02平面・断面図	17
図17. SE02出土遺物（1）	18
図18. SE02出土遺物（2）	19
図19. SE03平面・断面図	20
図20. SE03出土遺物	21
図21. SB01平面・断面図	22
図22. SB01・02・03出土遺物	23
図23. 弥生～古墳時代遺構平面図	24
図24. SB02平面・断面図	25
図25. SB03平面・断面図	26
図26. SB04平面・断面図	27
図27. SB05平面・断面図	28
図28. SB04・05・SX20出土遺物	29
図29. SX20出土遺物	30
図30. SX20平面・断面図	30
図31. SX21平面・断面図	30
図32. 流路1・2・3・4・5平面・断面図	32
図33. 流路1・2・5・6出土遺物	33
図34. SD01出土鉄製品	34
図35. SB01サンプリング位置図	40



挿図写真1 周辺空中写真（調査区より西方 雪御所遺跡を望む）

挿図写真目次

挿図写真 1. 周辺空中写真	iii	挿図写真10. S-2 破断部分 (24倍)	36
挿図写真 2. 重機掘削	2	挿図写真11. S-2 内面 (5倍)	36
挿図写真 3. 道構検出手作業	2	挿図写真12. S-2 断面 (透過光, 50倍)	36
挿図写真 4. ラジコンヘリ空中写真撮影	2	挿図写真13. S-2 断面 (透過光, 100倍)	36
挿図写真 5. 現地説明会	3	挿図写真14. 木材及び炭化材顕微鏡写真	40
挿図写真 6. 平野小学校見学会	3	挿図写真15. サンプルNo.1	40
挿図写真 7. 道構記録作業	3	挿図写真16. サンプルNo.8	40
挿図写真 8. 現地展示コーナー	3	挿図写真17. 紙圖道路遠景	42
挿図写真 9. サンプル採取箇所	36		

写真 図版目次

図版 1	1 道構面全景 [平安時代～中世] (空中写真)	4 SD05 土層断面
	2 道構面全景 [平安時代～中世] (空中写真・北より)	図版14 1 道構面全景 (弥生～古墳時代) (空中写真)
図版 2	1 SE02 遺物出土状況	2 同 全景 (北から)
	2 SD01 土層断面 (西から)	図版15 1 SB01 (北東から)
	3 同 遺物出土状況 (西から)	2 同 炭化材出土状況
図版 3	1 SB01～04	3 同 中央土坑
	2 SB01 炭化材出土状況	図版16 1 SB02 (南から)
図版 4	1 SD02 出土白磁	2 SB02・03 (南西から)
	2 SE02 出土漆塗布紙	3 SB02 遺物出土状況
	3 SE02 出土青磁・白磁	4 SB03 遺物出土状況
図版 5	1 SB01 出土弥生土器	図版17 1 SE04 (北東から)
	2 SB04 出土弥生土器	2 同 遺物出土状況 (北から)
	3 流路 5 出土弥生土器	3 同 細部 (北から)
図版 6	1 道構面全景 [平安時代～中世] (空中写真)	図版18 1 SB05 (南東から)
	2 道構面全景 [平安時代～中世] (北西から)	2 SX20 遺物出土状況 (西から)
図版 7	1 SB11 (西から)	3 SX21 (東から)
	2 SB12 (東から)	図版19 1 流路 1 (西から)
図版 8	1 SB11・SB12 (東から)	2 流路 2 (東から)
	2 SB13 (南から)	3 流路 4 (南西から)
図版 9	1 SP04	図版20 1 流路 5 (北から)
	2 SP07	2 流路 5 遺物出土状況 (東から)
	3 SP33	3 流路 6 (東から)
	4 SP41	図版21 1 SD01 出土遺物①
	5 SP42	図版22 1 SD01・SE02・SP60・119 出土遺物②
	6 SP41	図版23 1 SE02 出土遺物③
図版10	1 SD01 (北西から)	図版24 1 SE02 出土遺物④
	2 同 (東から)	図版25 1 SE02 出土遺物⑤
	3 同 遺物出土状況 (南東から)	図版26 1 SE02 出土遺物⑥
図版11	1 SE02 上～中層 (北から)	図版27 1 SE03 出土遺物
	2 SE02 下層疊群出土状況 (南から)	図版28 1 SB01・02・03 出土遺物
	3 SE02 完掘状況 (南から)	図版29 1 SB04・05 出土遺物
図版12	1 SE03 上層断面 (南から)	図版30 1 SX20 出土遺物
	2 SE03 下層 (南から)	2 出土石器
図版13	1 SD09	図版31 1 流路 1・2・5・6 出土遺物
	2 SP119	卷頭(表) 道構面全景 [平安時代～中世] (北西から)
	3 SD03 上層断面	(裏) SD01・SE02出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

祇園遺跡は、神戸市兵庫区上祇園町一帯に存在する遺跡として知られており、平成23年までに13次におよぶ調査が実施され、幻とされていた福原京の実態が少しづつではあるが明らかにされてきた。

今回の調査は店舗建設に伴うもので、平成23年4月に試掘調査が実施され、この結果遺構・遺物が確認された。事業者との協議のうえ建設工事によって地下の埋蔵文化財に影響を与える部分約1000m²について平成23年8月から同年11月まで調査を実施した。

調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て実施した。それぞれの調査組織は、以下のとおりである。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）

工渠 普通 大阪府立狭山池博物館長

和田 晴吾 立命館大学 文学部教授

平成23年度

（現地調査）

平成24年度

（報告書作成）

教育委員会事務局

教育長

永井 秀憲

教育委員会事務局

永井 秀憲

社会教育部長

大寺 直秀

東野 展也

教育委員会参事

安達 宏二

文化財担当部長

安達 宏二

（文化財課長事務取扱）

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹

千種 浩

埋蔵文化財担当課長

千種 浩

（埋蔵文化財係長事務取扱）

（埋蔵文化財係長事務取扱）

文化財専門役

丸山 潔

文化財専門役

丸山 潔

文化財課主査

丹治 康明

文化財課担当係長

丹治 康明

同

安田 滋

同

安田 滋

同

斎木 嶽

埋蔵文化財センター担当係長

斎木 嶽

事務担当学芸員

佐伯 二郎

事務担当学芸員

佐伯 二郎

井尻 格

井尻 格

中谷 正

中谷 正

小林さやか

小林さやか

調査担当学芸員

内藤 俊哉

報告書担当学芸員

内藤 俊哉

保存科学担当学芸員

中村 大介

保存科学担当学芸員

中村 大介

遺物整理担当学芸員

西岡 誠司

遺物整理担当学芸員

藤井 太郎

阿部 敬生

調査の経過

調査の経過は、次のとおりである。

平成23年8月3日より重機掘削を開始する。調査対象面積は約1,000m²で、残土処分をしながら調査区の南側から調査を実施する。

従前の建物のレンガ基礎が縦横に多くみられる。

調査区の南側では、包含層は殆んどみられず旧耕土を除去した後に順次遺構検出作業を行う。

8月12から15日のお盆休業明けの後、8月17日、調査区南部において弥生時代の竪穴建物を確認した。さらに調査区南端でSD01を検出する。

その後、南に検出を拡げるに従って竪穴建物の検出が相次ぐ。

8月25日、重機掘削完了。

8月下旬に入り、検出作業が調査区中央部にかかったあたりから、柱穴と思われるピットが多数確認されるようになる。

9月6日、ほぼ調査区全域の遺構面が出揃い遺構の掘削を開始、平板測量等により掘立柱建物の確定を進める。

9月8日 SD01より白磁水注片出土、9月12日より掘立柱建物群、15日よりSE02・03の掘削を開始する。同時に写真撮影や記録作業を行う。台風の影響によって遺構面が水没し柱穴の埋土が崩れる事態も起こる。

10月5日には、兵庫県立友が丘高校の生徒12名が見学。

6日にはSE03については重要な遺構であることが判明したため事業者の了解を得て拡張を実施する。

平安時代～中世の遺構掘削後10月12日にラジコンヘリによる空中写真撮影を実施する。

その後、遺構の記録作業などの調査と並行して調査は弥生時代の遺構の掘



挿図写真2 重機掘削



挿図写真3 遺構検出作業



挿図写真4 ラジコンヘリ空中写真撮影

前に移る。

10月13日には現地指導のため、同志社大学の鋤柄俊夫先生、24日には文化財保護審議会委員の工楽善通先生が現場來訪。

10月31日、これまでの成果をもとに記者発表を行い、報道関係者に現地を公開する。

11月3日には、現地説明会を開催し、1760名の参加者を得た。

11月7日には、近隣の平野小学校5・

6年生100名による見学も催される。

以降さらに遺構検出、遺構掘削を続行し、11月9日にはラジコンヘリによる写真撮影、写真測量を実施する。

11月14日には、国立歴史民俗博物館玉井哲雄先生により検出した掘立柱建物について現地指導を受ける。

11月15～17日には、井戸の断ち割り作業をおこなう。

これをもって遺構面の調査は終了し撤収作業にかかった。

11月19日には器材搬出作業を行い、すべての現地調査を終了した。

その後現地では、建築工事がおこなわれ平成24年10月23日にトーホーストア平野紙園店としてオープンしたが、開店に先立ち事業者より調査の成果を現地において顕彰するため店舗内に展示コーナーを設けたい旨の依頼があり、出土遺物や写真パネルなどを展示した。



挿図写真5 現地説明会



挿図写真6 平野小学校見学会



挿図写真7 遺構記録作業



挿図写真8 現地展示コーナー

第2節 遺跡の位置と歴史環境

祇園遺跡は、六甲山系から注ぎ込む天王谷川によって形成された扇状地の頂部に位置する。

一帯は、『山槐記』に登場する「平野」にあたる。平安時代後期に平清盛が京都より移り住み、やがて福原遷都の中心地となる場所と考えられる。考古学的にも平成6年に実施された第2次調査とその後の第5次調査において12世紀後半から末頃にかけての貴族の邸宅に伴うと考えられる庭園造構が発見されている。出土した多量の土器や瓦は、京都周辺で生産されたものも含まれており、中央政権との深い関係を物語っている。さらに隣接する第3次調査においては、中国(宋)との貿易を物語る吉州窯系玳破天目小碗なども出土している。

また、第8次調査や第12次調査においては弥生時代後期の竪穴建物なども確認している。

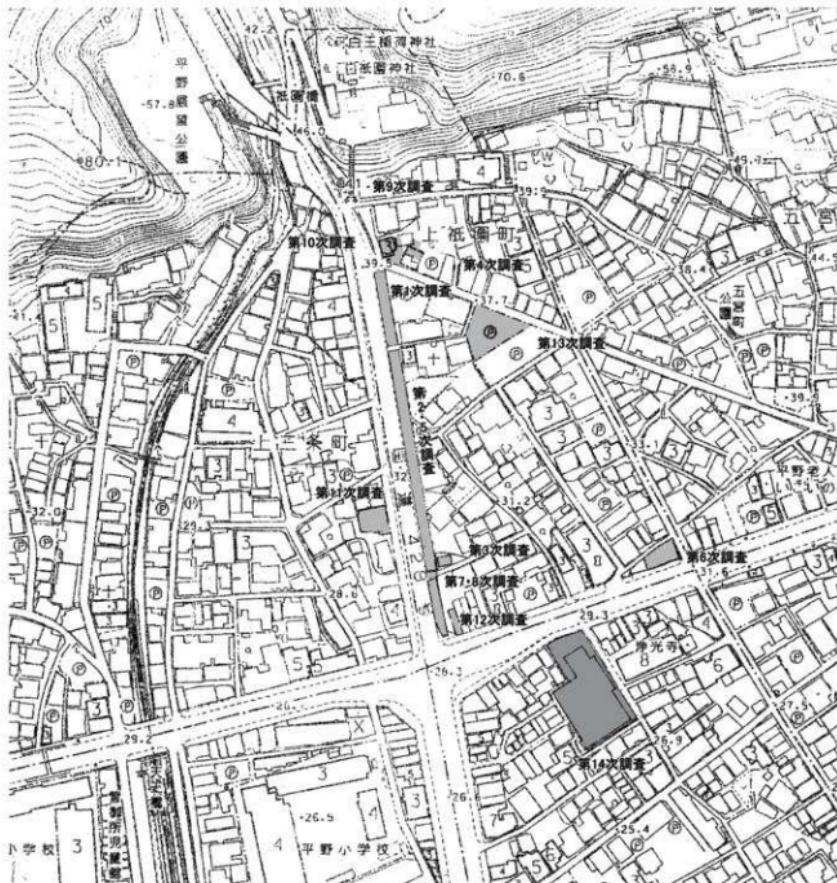


図1 今回の調査地と周辺調査区 ($S = 1:2,500$)

周辺には、すぐ西に平安時代の瓦が出土した雪御所遺跡がある。また南には谷筋を挟んで楠・荒田町遺跡があり、神戸大学医学部附属病院構内の一連の調査において平安時代後期の二重の壕や建物群などが確認されている。さらに南の海岸部には、平清盛によって開発された「大輪田泊」の推定地である兵庫津遺跡がひろがっている。

主要参考文献

「福原京」に関するもの

1. 石田善人 「平氏政権の崩壊」『兵庫県史』第二巻 兵庫県 1975
 2. 高橋昌明 「平清盛 福原の夢」 講談社 2007
 3. 藤本史子・中井淳史編『兵庫津の総合的研究』 大手前大学史学研究所 2008
 4. 元木泰雄 「平清盛の開い 幻の世紀国家」 角川書店 2001
 5. 山田邦和 「『福原京』の都市構造」『古代文化』第57-4 ?古代学協会 2005
 6. 神戸市教育委員会『平氏と神戸の遺跡』2012
 7. 歴史資料ネットワーク編『歴史のなかの神戸と平家』神戸新聞総合出版センター 1999
 8. 歴史資料ネットワーク編『平家と福原京の時代』岩田書院 200
- 発掘調査報告書
1. 岡田章一・久保弘幸・深江英憲『楠・荒田町遺跡－神戸大学附属病院構内遺跡－』 兵庫県教育委員会 1997
 2. 富山直人編『祇園遺跡 第5次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2000
 3. 別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会 2008
 4. 富山直人・小林さやか『楠・荒田町遺跡 第42・43・46次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011
 5. 本市教育委員会の実施した祇園道路の発掘調査成果については、各年度の神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財年報』を参照されたい。

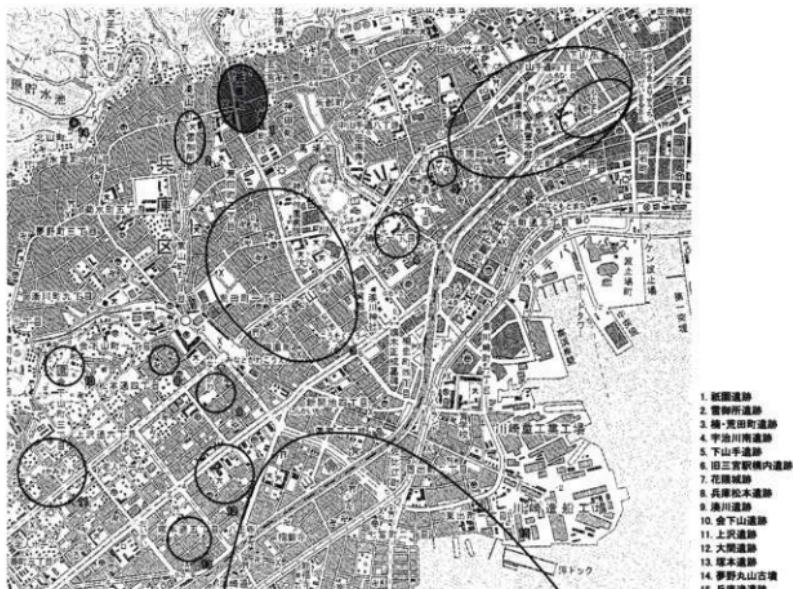


図2 周辺遺跡図 (S=1:25,000)



図3 祇園遺跡周辺位置図・周辺微地形図 ($S = 1 : 10,000$)

第2章 調査区の設定

第1節 調査区の設定

今回の調査対象となった部分は、東西25m、南北42mの約1,000m²である。

なお、調査区の敷地は周辺一帯の街並み同様に座標軸に対して40度ちかく振っている。位置関係の呼称の煩雑さを避けるために、本報告においては便宜上、丘陵地形に向かう道路側を北、反対の海岸線に向かう側を南とした。

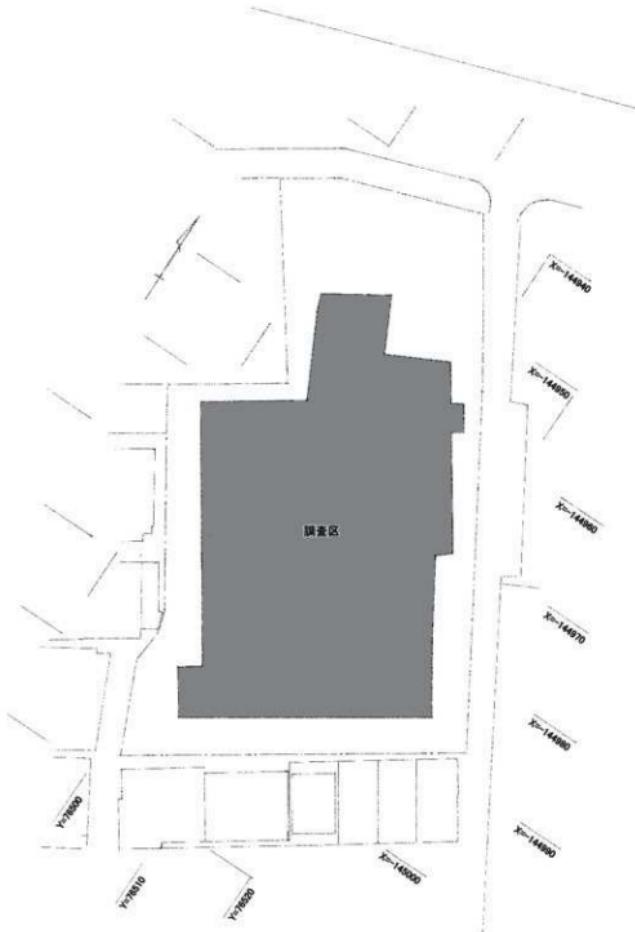


図4 調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は、まず調査区全体に近現代の整地の盛土がみられる。敷地内の北10mほどは、北側の道路面に高さをあわすため1m以上の嵩上げがみられる。また南半部では20~40cmの盛土があり近世の耕作に伴うと考えられる耕土・床土層が数層堆積した下で遺構面に達する。調査区の中部において中世の遺物を含む暗褐灰色土が数~10cm堆積している。

第2節 調査の概要

調査は、盛土・擾乱層、近世耕土層までを重機により除去し、以下は人力により遺物・遺構の検出作業を行った。

検出遺構 今回の調査で検出された遺構面は1面であるが、大別して弥生時代中期～古墳時代、平安時代後期を中心とする時期の二時期の遺構を検出した。以下、各時期の調査の概要を述べる。

平安時代～中世の遺構 主な遺構としては、調査区の北半部において南北方向の溝群と南東の落ち込み、中央部の掘立柱建物3棟と柵列1条、およびこれらに先行する井戸2基、また調査区の南端において敷地内を区画すると考えられる溝1条などがある。

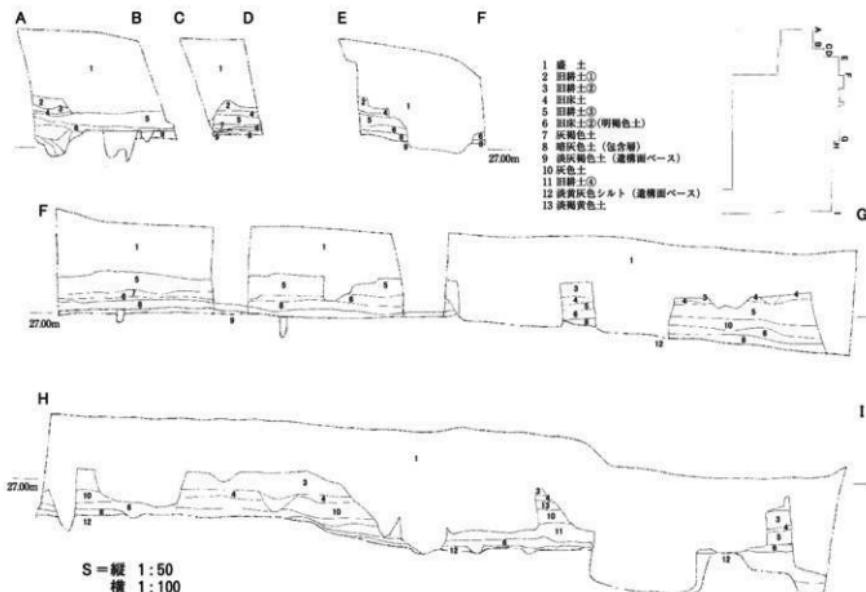


図5 調査区断面図



図6 中世～平安時代後期 調査区平面図

SB11

調査区中央部の東に位置する南北5間(10.7m)、東西3間(6.0m)以上の掘立柱建物で調査区東外に拡がるようである。

柱穴は直径20~30cmで総柱の構造をもつ。また柱穴の深さは、10~40cmでSB12に比べると比較的浅い。柱間は2.0~2.2mを測る。SD07によって切かれている。

建物の棟は、N58°E(正南北方向より58°東に傾く)方向で築かれている。

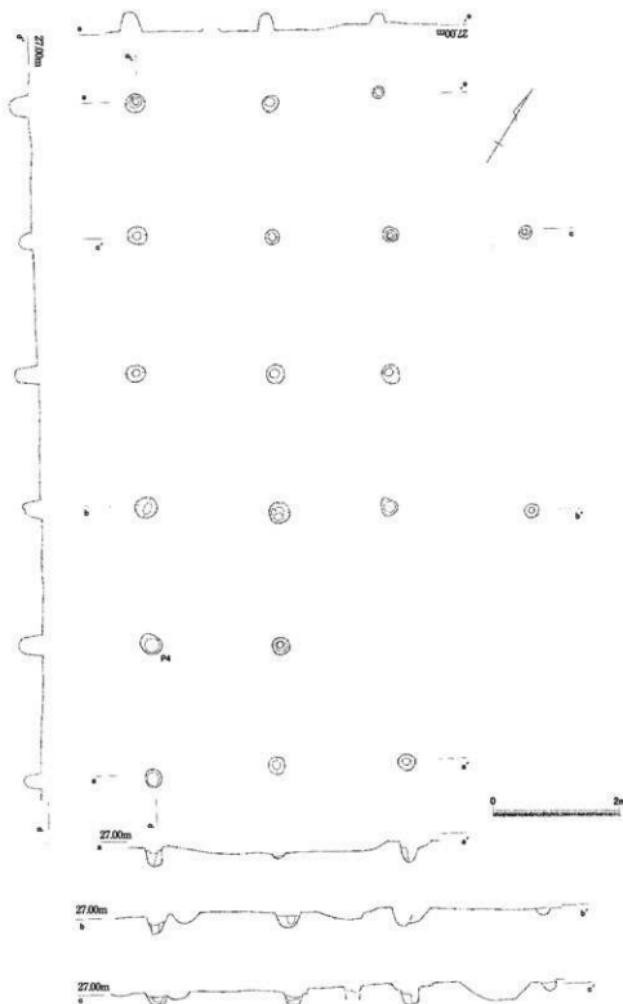


図7 SB11平面・断面図



図8 調査区北半部平面図

SB12

SB11の西に並ぶように建つ、南北4間（8.6m）、東西5間（11.8m）で東側に半間の庇もしくは縁が付く掘立柱建物である。柱間は、2.0～2.3mで庇（縁）に出は1.0mを測る。

北東部分において柱穴がSE02を切っている。

柱穴の直径は、30～45cm、深さ30～70cmとSB11よりひと回り大きく、建物の南辺では底部に石が据えられたものが認められた。

建物の棟軸は、N59°E（正南北方向より59°東に傾く）方向でSB11と僅かに違える。柵列1とはかなり近接しているため同時に存在していた可能性は低い。

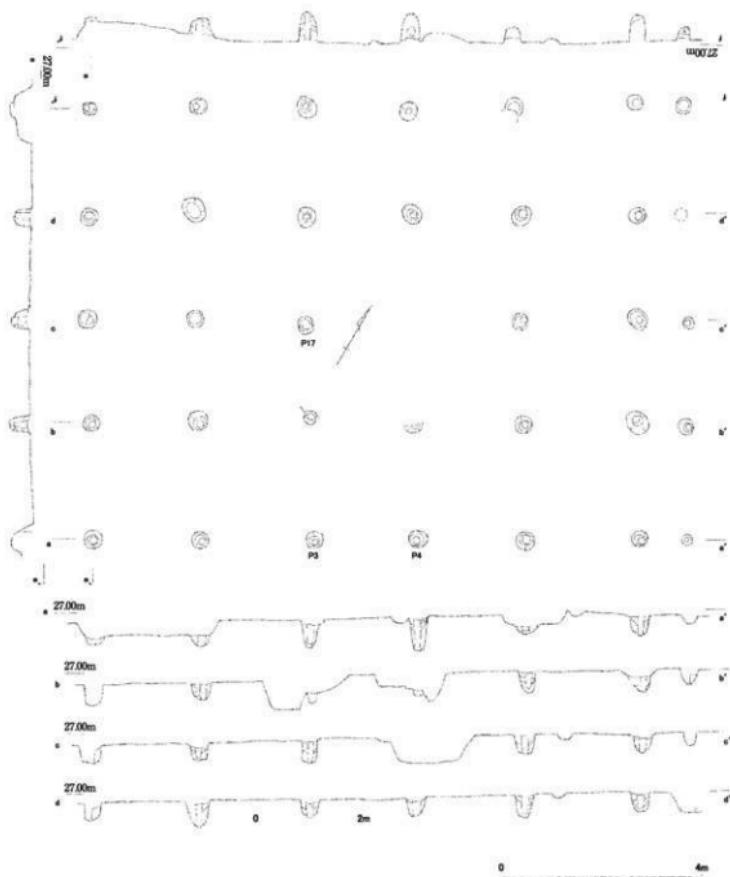


図9 SB12平面・断面図

SB13

SB11・12の北側に位置する掘立柱建物で、南北3間（5.8m）、東西4間（8.4m）以上の規模で、さらに調査区外に拡がる。南西隅の柱穴については、周辺の削平が激しく確認できなかった。

縦柱建物で柱穴の直径は20～30cm、深さ20～40cmを測る。柱間は、1.8～2.4mで、建物の棟方向は、SB11とほぼ同じ方向をとる。

SE03とプランが重複するが、直接の切り合い関係がないため検出状況から前後関係は不明である。

柵列1

調査区の中央でSB11とSB12の間を区切るように設けられた南北方向の柵列である。5間分が検出され、長さは11.1mを測る。

柱穴の直径は、25～50cm、深さ25～30cmを測る。柱間は2.1～2.4mを測る。西側には、ほぼ同じ方向にはしる溝SD09がある。建物との前後関係については不明である。

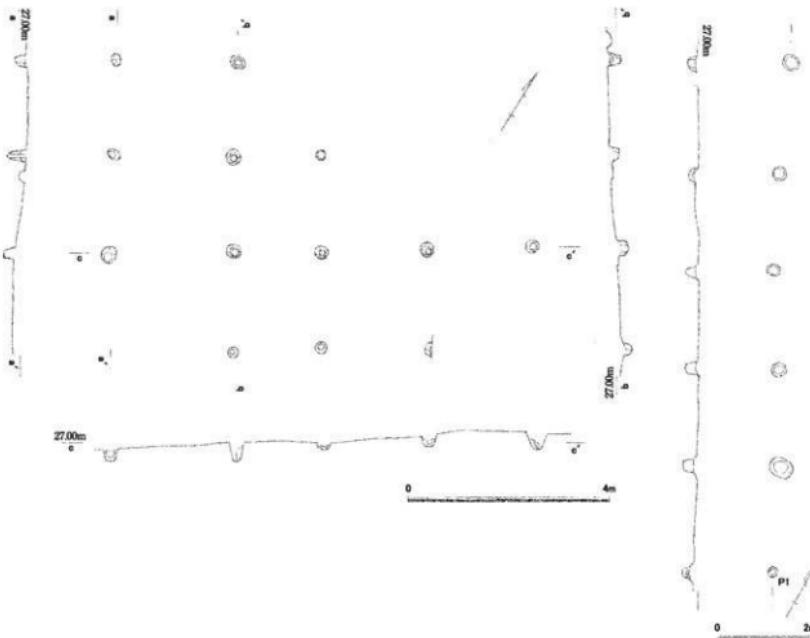


図10 SB13平面・断面図

図11 柵列1平面・断面図

SD01（区画溝） 調査区の南辺に沿うように検出された幅0.8~1.0mの東西方向の溝である。調査区の中ほどで途切れおり11.5mを確認したが調査区外西にはさらに延びる。

断面はU字形で深さは40cmを測るが、近世段階で耕作面整地のため数10cm分が削平されているようである。埋土の中層には焼土を含んでおり、この層から土器類も多く出土している。SE02からも多量にもみつかっている土師器の皿をはじめ、須恵器の大型甌や白磁の水注や山茶椀なども出土している。

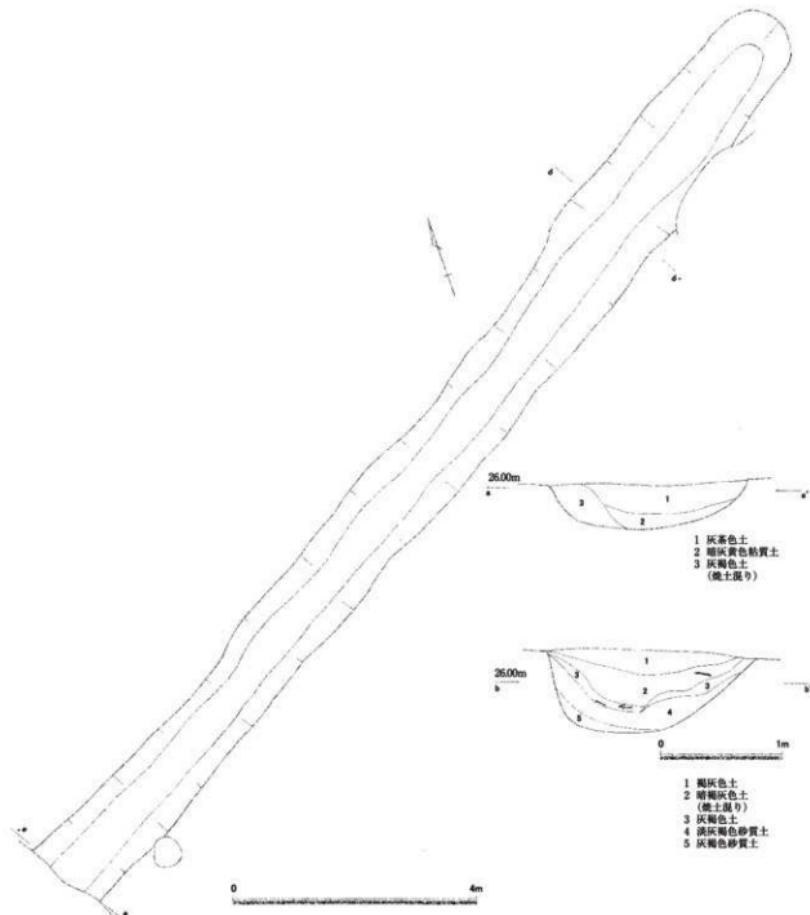


図12 SD01平面・断面図

出土遺物

出土遺物は、土師器小皿（1～20）・中皿（21～36）・甌（46）、瓦器椀（40）・小椀（39）・皿（37・38）、須恵器鉢（47）、山茶椀（44・45）、白磁椀（41～43）、白磁水注などがある。また図化していないが、白磁の水注や搬入された須恵器甌の破片（写真図版22・281）、灰釉系と考えられる破片（写真図版22）なども出土している。

土師器の小皿はほとんどが口径7.0～9.0cmを測るもので、うち1はコースター形、3・4は回転台成形である。また20の小皿は他の小皿より一回り大きく深いつくりで口縁部に炭化物が付着する。

土師器中皿は、口径13.0～14.8cmで、口縁端部を丸く収めるもの（21～24）と強くなめて三角形にするもの（25～34）、平らに収めるもの（35・36）がある。

37・38は瓦器皿、40の瓦器椀は和泉型で見込み部に鋸歯状の暗文が施されている。39の小椀は磨滅が激しく調整は不明である。

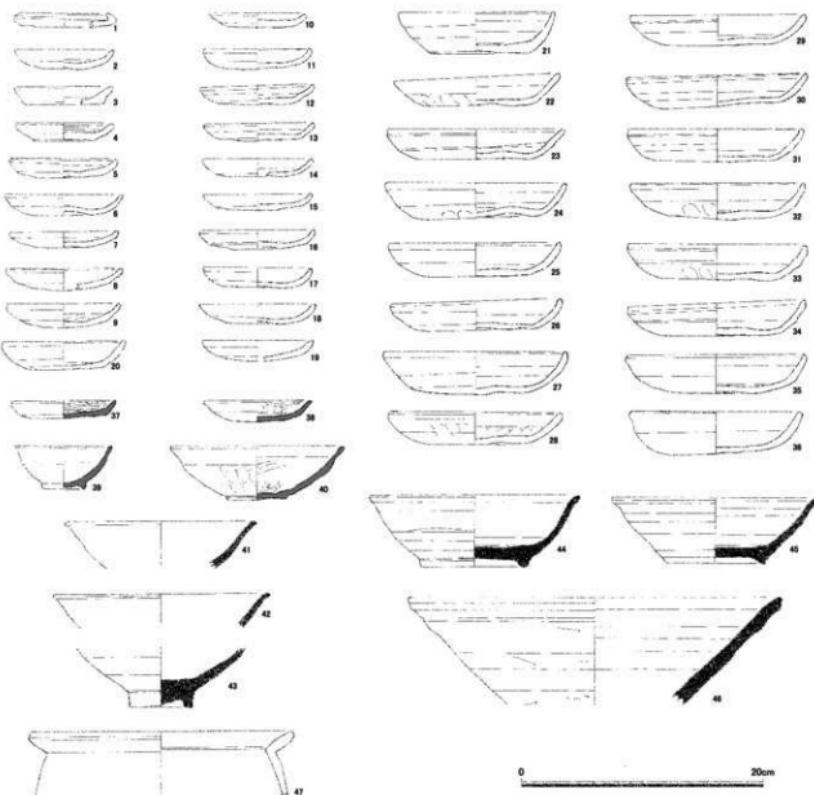


図13 SD01出土遺物

44・45の山茶椀は東海地方からの搬入品と考えられる。須恵器甕の破片は、胴部の下半部で屈曲するもので外面に格子状のタタキがみられる。

白磁碗は口縁端部を横方向に折り返している。47の鉢は東播系の須恵器である。

この他に、滑石製の石鍋の破片などが出土している。

SD02 調査区の西端を南北にはしる幅80~90cm、深さ30~70cmの溝である。後述のSD03~07と方向を揃えるものの、間隔が開いており掘形もやや急であること、北端でやや広く圍まれたような部分があることから違う目的の溝かもしれない。

溝群 (SD03~07) 調査区の北部から中央部を北から南方向にはしる幅20~50cm、深さ10~25cmの溝である。

断面形は緩いU字形で底面は平である。柱穴、井戸など殆どの遺構を切っており検出遺構の中では一番新しい時期に属する。

SD03~07までの5条がほぼ3.5mの等間隔で掘削されている。耕作に関連するものと考えられる

SD09 調査区の中央部を南北にはしる、幅50~60cm、深さ15cmの溝で長さ約3mを検出した。埋土には土師器の小片が多く含まれていた。

SD10 調査区の中央部を北西から南東にはしる幅25~35cm、深さ8cmの溝である。途中SD04・05に切られながら6mほどが検出された。

SE02 調査区中央部の北寄りに位置する井戸である。南北3.0m、東西2.6mの平面規模をもつが、埋土は擂鉢状に順に堆積しており井戸枠の痕跡は認められなかった。井戸の廃棄時に井戸枠等の資材を抜き取った掘形と考えられる。深さは、検出面より約3mある。埋め戻し時には祭祀に伴うと考えられる多量の土師器や瓦器の皿、椀が投入されている。

前述のSB12と切り合い関係にあり先行する。

出土遺物 土師器では小皿(49~103・150・151)・中皿(104~144)・椀(145~149)・鍋(186)、

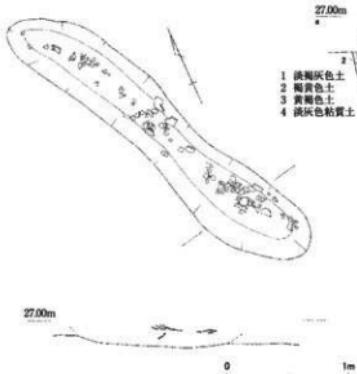


図14 SD09平面・断面図

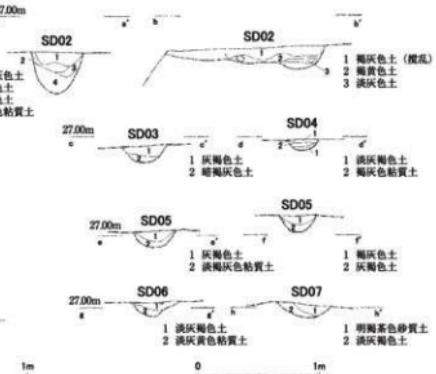


図15 SD02~07断面図

瓦器の椀（156～173）皿（152～154）、須恵器椀（175）・皿（156）、白磁椀（176～181）、青磁皿（182・183）、青白磁合子（184・185）などが出土している。

土師器小皿の48～50はコースター型、52～72は回転台成形である。また53～55の小皿は他の小皿より小型である。150・151の底部には穿孔がみられる。

土師器中皿は、手づくね（104～134）と回転台成形（135～144）によるものがある。

手づくねによるものには、口縁端部を丸く収めるもの（104～112）、口縁から体部上半を強くナデ段をもたせるもの（111・112）、口縁端部を強くなじて三角形にするもの（113～116・120・121）、平らに収めるもの（117～119・122）、口縁端部を摘み上げるようになで立ち上げるもの（123～131）などがある。

回転台成形の中皿のうち135～137・140・143・144などは、杯にちかい器形をもつ。

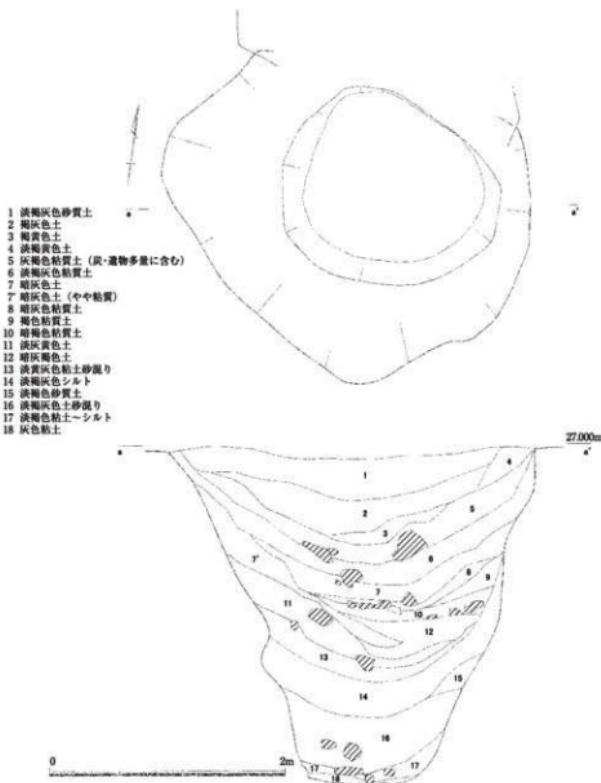


図16 SE02平面・断面図

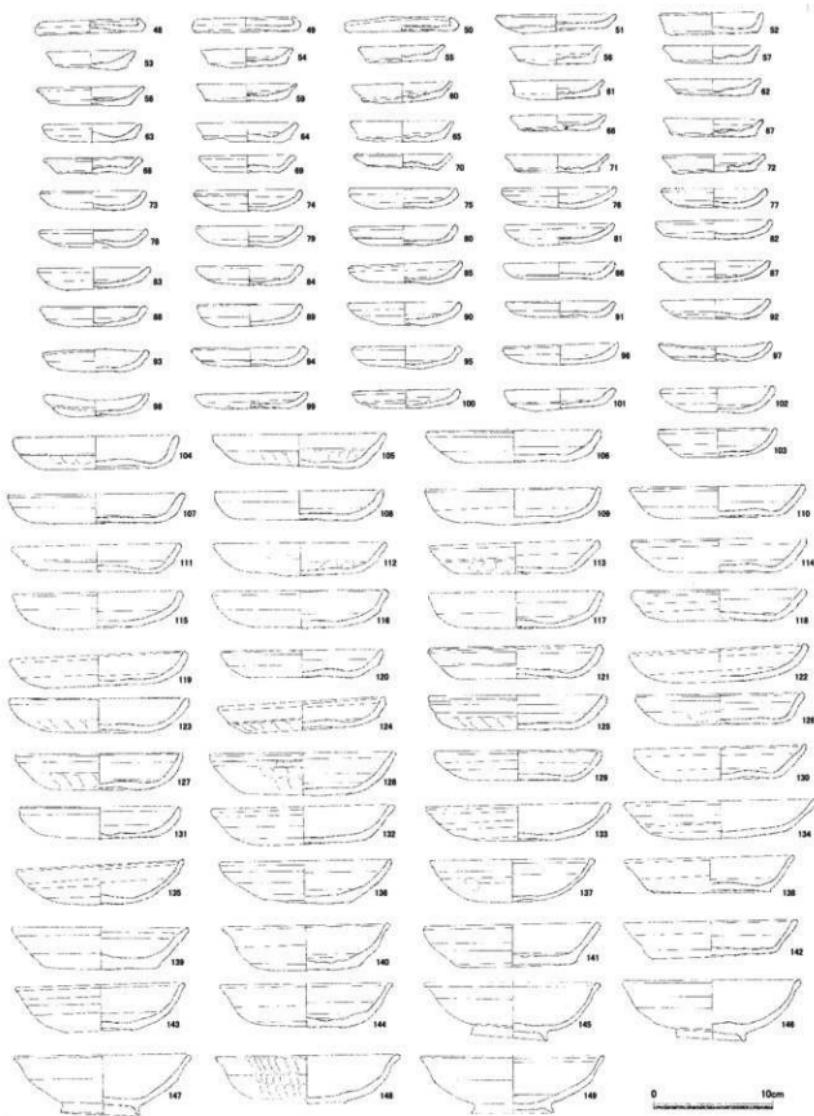


図17 SE02出土遺物（1）

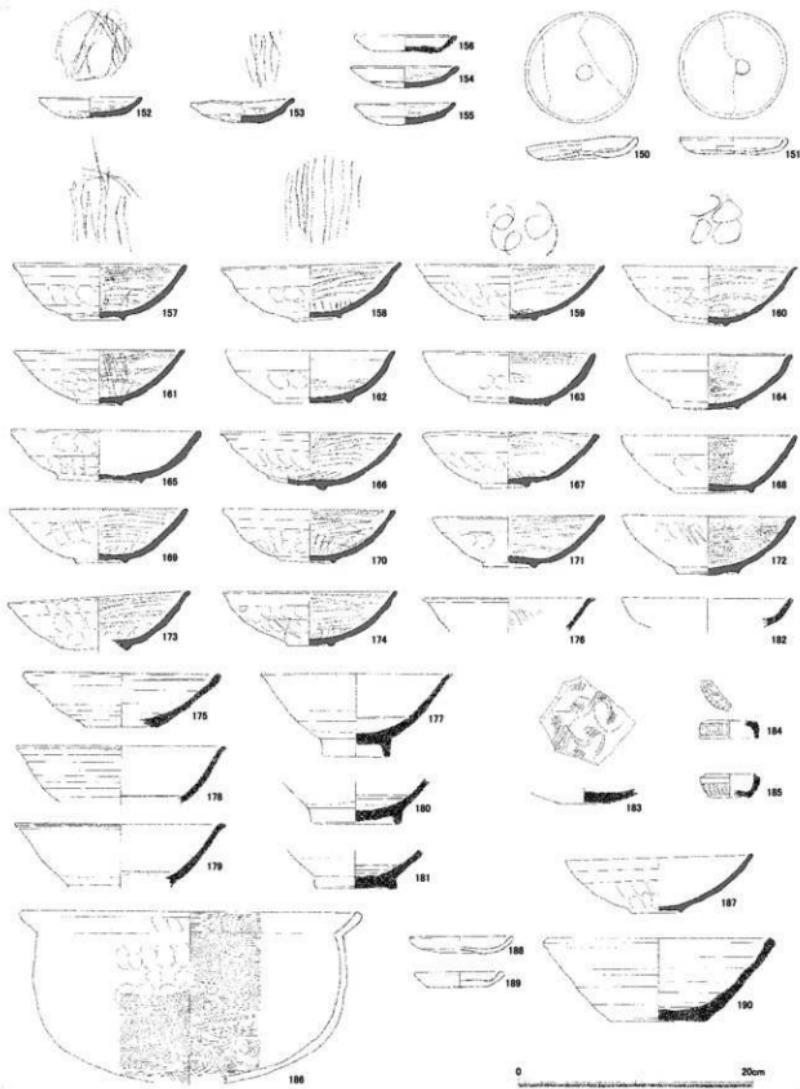


図18 SE02出土遺物（2）

土師器椀は口縁端部を丸くおさめ肥厚させるもので、体部に指圧痕を残す。145は高台の位置が偏って付けられている。

瓦器皿には見込み部に鋸歯状の暗文が施される。瓦器椀は和泉型のものが多い。見込み部にはどこかれた暗文には鋸歯状（157・161・169・170・173・174）、連結輪状（159・160）平行線状（158・166）のものなどがみられる。168・172は楠葉型の瓦器椀である。

図化できなかったが瓦質土器も出土している。大型の盤と思われる（図版26 283）。

中国製陶磁器のうち177の白磁椀は口縁端部を折り返し平らにし高台を高く削りだす。183の青磁皿には花文がみられる。184・185の青白磁は平型合子の蓋と身で、菊座状の側面をもつ。

動物遺存体 SE02からはウシの歯が2点出土している（写真図版26）。いずれも下顎臼歯で、写真左が左下顎後臼歯（M₂）、同右は右下顎後臼歯（M₂）である。腐朽や咬合面の磨耗状況などから、同一の個体に由来するものと考えられる。歯槽骨が部分的に残存するが、他の歯が出土していないため、下顎全てが存在したかどうかは不明である。また、咬合面の磨耗がほとんど見られないことから、崩出後間もない、月齢およそ12~18ヶ月程度の個体と考えられる（1）。なお、解体痕など人為的な痕跡は認められなかった。

この他、漆が塗布された紙片や、木製の下駄なども出土している。これらは、別節を設けて記述する。（1）1998 Dyce ほか著 山内昭二ほか監訳『獸医解剖学』近代出版 参照

SE03 調査区の北東隅に位置する。径2.0m、深さ2.5mの規模をもつ井戸である。上～中層にかけて井戸枠を抜き取るための掘形が認められる。この部分には多量の石が投入されている。この礫層に遺物は殆ど含まれない。石は、長さ20~50cmの大きさで平たいものや焼けた痕の残るものなどが含まれる。不要になった礫石などの建築資材を廃棄した可能性がある。

抜き取り掘形の下層においては四隅に支柱をもつ四角い枠が認められた。遺存状況は極めて悪く痕跡を留めるのみで、本組や材については不明である。

出土遺物 出土した遺物は、土師器皿（197・198）、小皿（191~195）、瓦器椀（199~201）・皿（196）、須恵器椀（202~207）などである。

図示した土師器小皿中、119には底部に穿孔がみられる。194は丸底でやや深い器形をもつ。また本遺構から中皿の出土は少ない。197は口縁端部を強くなでのもの、198の底部には糸切痕がみられる。

瓦器椀は和泉型で199にはやや変形した格子状201には鋸歯状の暗文が見込みにみられる。

須恵器椀は、いずれも東播系のもので202~204は見込み部にやや窪みを残す。

その他の遺構 SD01・SE02・SE03以外の平安時代から中世にかけての時期の遺構で良好な遺物が出土したものは、非常に少ない。遺物包含層からの遺物もほとんど細片ばかりである。図示できる遺物としては、調査区の南西隅のSP119からは瓦器椀（187）が、調査区南部のSP60からは土師器小皿（188・189）が出土している。

また、調査区の中央部東に位置するSX04は、3.5m×2.5m、深さ25cmほどの隅丸方形落ち込み状の遺構で須恵器鉢（190）が出土している。

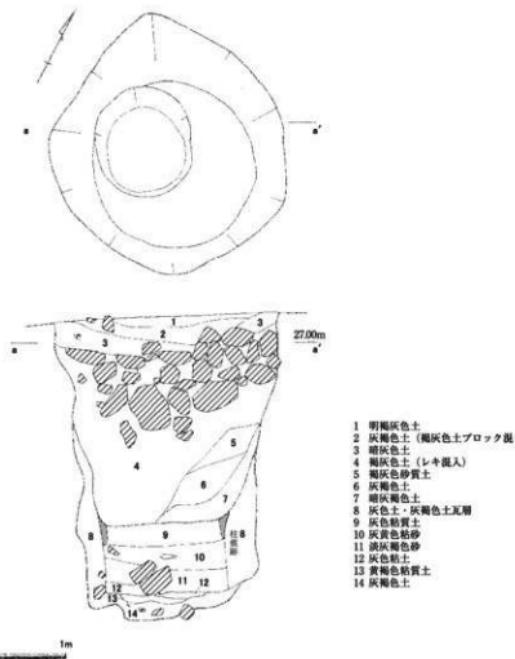


図19 SE03平面・断面図

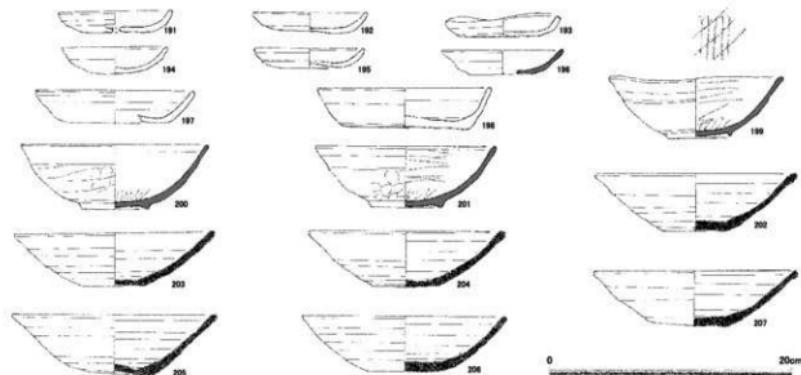


図20 SE03出土遺物

弥生時代中～後期 平安時代の遺構と同一面において弥生時代中期の竪穴建物4棟、竪穴建物状の落込み古墳時代の遺構 1基、古墳時代前期の竪穴建物1棟および弥生時代後期と古墳時代の流路を検出した。

SB01 調査区南部に位置する円形の竪穴建物で径8.0mの規模をもつ。南側の一部は調査区外に拡がる。近世の耕作により大きく削平を受けており、深さは数cmしか残っていない。

床面などは火を受けて赤変している部分があり炭化した材も散在することから焼失家屋であると考えられる。

4本の主柱穴を持つようであるが、1基は攢乱によって消失している。ほぼ中央に径1.0m、深さ30cmの円形の土坑があり、底部には炭が混じる。また幅15～10cm、深さ数cmの周壁溝が部分的に巡る。出土遺物より弥生時代中期（畿内第IV様式）に属すると考えられる。

出土遺物 出土遺物は、弥生土器壺（212・215）、甕（211・214）、水差し形土器（213）、台付鉢（210）蓋形土器（208）などがある。

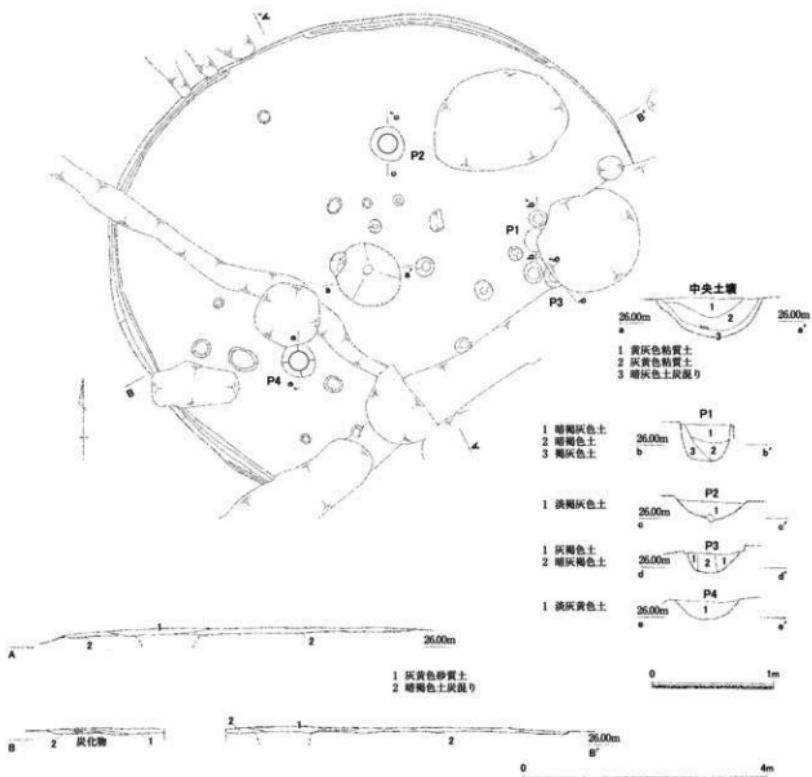


図21 SB01平面・断面図

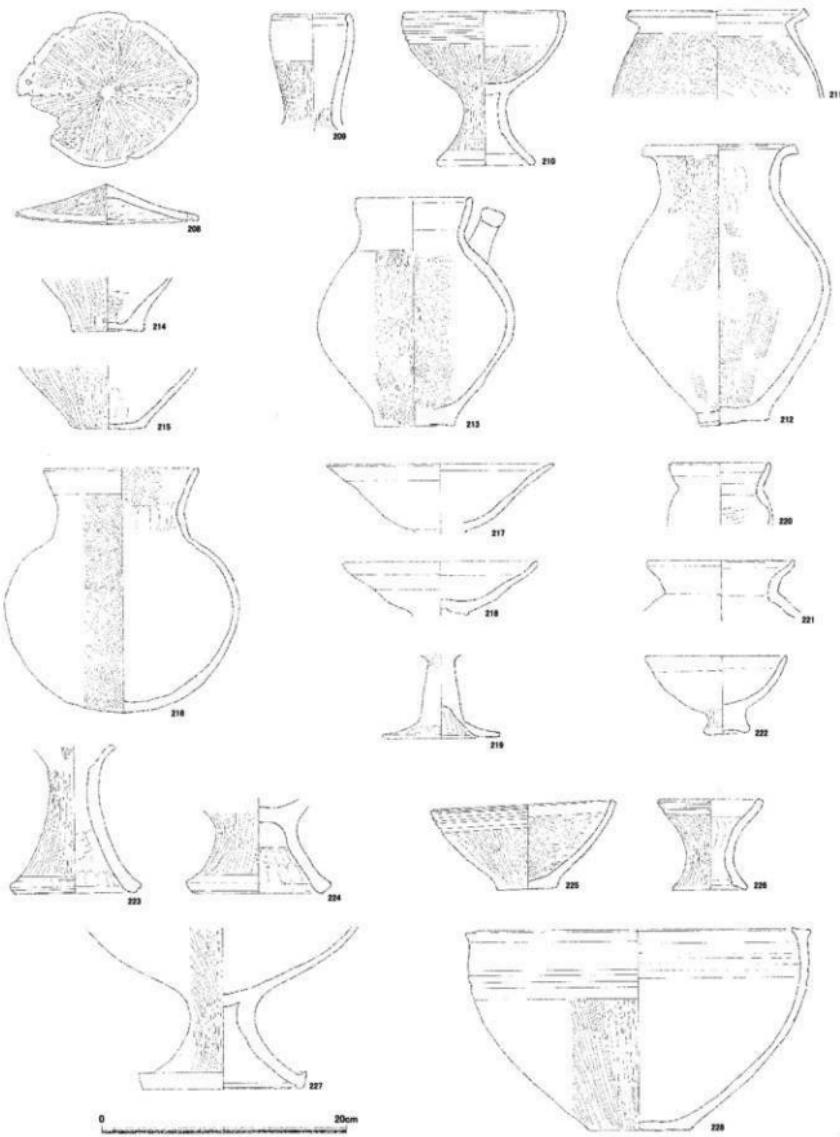


図22 SB01・02・03・04出土遺物

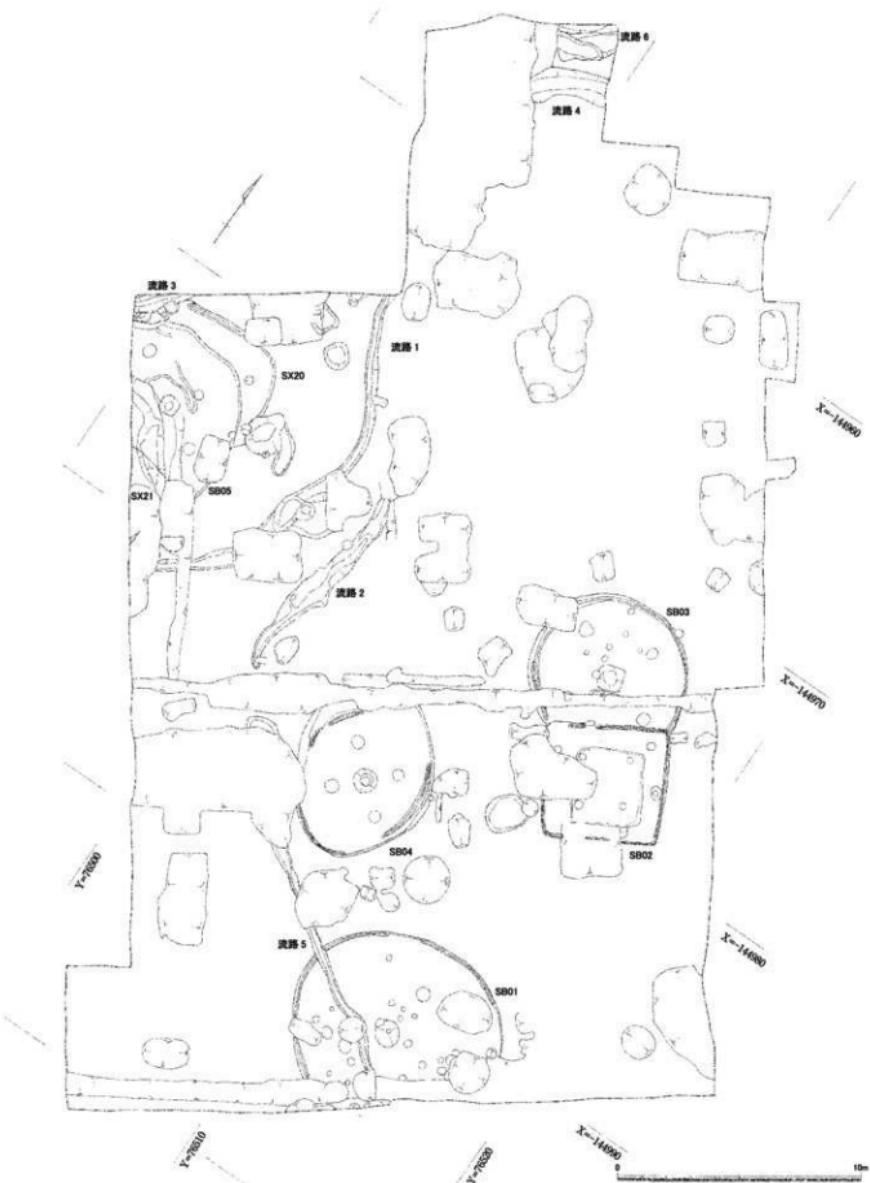


図23 弥生～古墳時代造構平面図

SB02

212の壺は、内外面ともハケ調整がみられる。213は、取手付水差形土器で内外面ともハケ調整がみられる。210の台付鉢は、口縁端部が水平にナデられ4条の凹線が施される。208の蓋は、木葉型の偏平なもので長軸の両端に2箇所ずつの穿孔がみられる。表面にヘラミガキ、内面にケズリの調整が見られる。他に石鏡（写真図版30-286）が出土している。

出土遺物

出土遺物は、壺（216）、甕（221）、小型壺（220）、台付鉢（222）、高杯（217～219）などがある。

216の壺は、丸底で内面の体部にはケズリ、口縁部と外面の頸部から体部にハケ調整がみられる。220の小型壺は、内面にケズリが施されている。221の甕は口縁端部を摘まみ上げるもので表面にタタキがみられる。217・218の高杯は、内外面ともナデ仕上げで稜はほとんど持たない。222の台付鉢は、小型で口縁部にヨコナデが見られる。

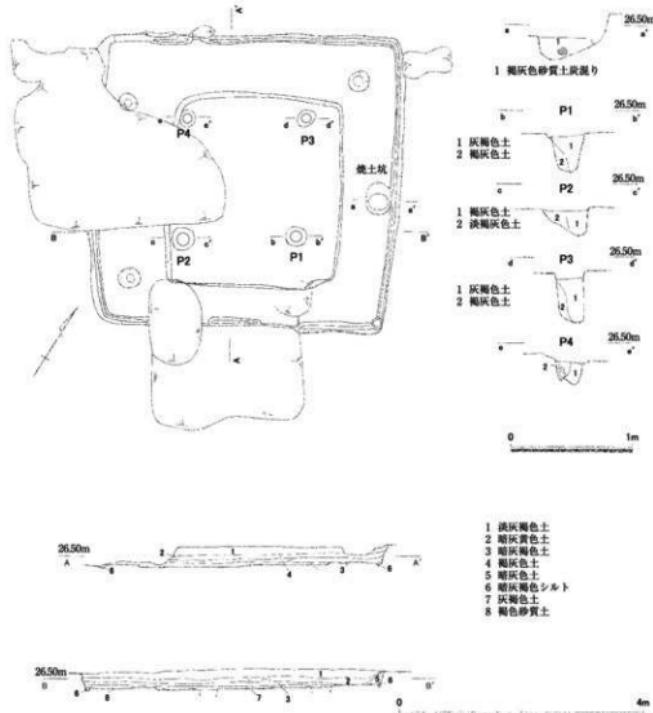


図24 SB02平面・断面図

SB02の北に位置する円形の竪穴建物で、径6.5m、深さ12~20cmの規模をもつ。周囲に幅10~25cm、深さ10cm前後の周壁溝を巡らす。径40~50cmの4本の主柱穴をもつ。

また中央部附近に一辺1.0m、深さ40cmの方形の土坑と、その南に隣接して長さ1.2m以上、幅40cm程度の溝状造構がみられる。溝状造構には下層の炭層もみられることから、北摂から播磨一帯に分布する「1〇(いちまる)土坑」と呼ばれるものと考えられる。

前述のとおり、SB02によって南側3分の1ほどを切られている。出土遺物は少ないものの弥生時代中期（畿内第IV様式）に属するようである。

出土遺物

図化できたのは高杯および台付の壺か鉢の脚部（223・224）などである。図化できなかつたが器台や凹線文をもつ高杯の口縁部も出土している。

223の高杯は、脚部の外面にヘラミガキ、杯部の取り付け部にハケ調整がみられ裾部に凹線を巡らす。224は低脚の台で外面には粗いヘラミガキが、また内面には、明瞭な指圧痕がみられる。

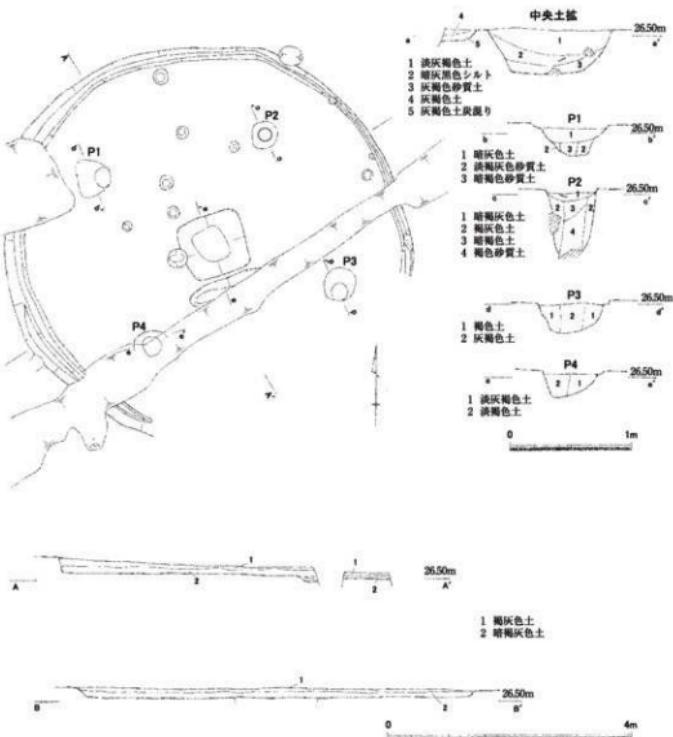


図25 SB03平面・断面図

SB04

調査区の中央部に位置する円形の竪穴建物で、南北6.0m以上、東西5.6m、深さ25cmの規模をもつ。攪乱によって南北両側を削平されている。東および西壁沿いに幅10~20cm、深さ数~10cmの周壁溝が巡る。また床面中央に径50cmの4本の主柱穴が1.0mの間隔で配され、中心に径0.8m、深さ60cmの土坑がある。

南寄りと北寄り部の2箇所において最終堆積に伴い多量の土器が廃棄されている。弥生時代中期（畿内第IV様式）のものと考えられる。

出土遺物

出土遺物は、甕（232~235）、鉢（225・228）、高杯（227・229）、台付土器（236）、器台（226）、蓋（230・231）などがある。石鐵も1点出土している。（写真図版30~287）

233の甕は大型でく字状の口縁である。外面をヘラミガキ、内面をハケ状の工具でケズリを施す。高杯は外面をヘラミガキ、底部は摘まみ上げられ稜をもつ。228の鉢は口縁端部が水平で体部との境に凹線を巡らす。225は、小型の鉢で口縁部に3条の凹線、体部をヘラ磨き、内面にはハケ調整がみられる。226は小型の器台で口縁部に2条の凹線以下にヘラミガキを施す。230の蓋は、表面をヘラミガキの後にヘラケズリを施す。

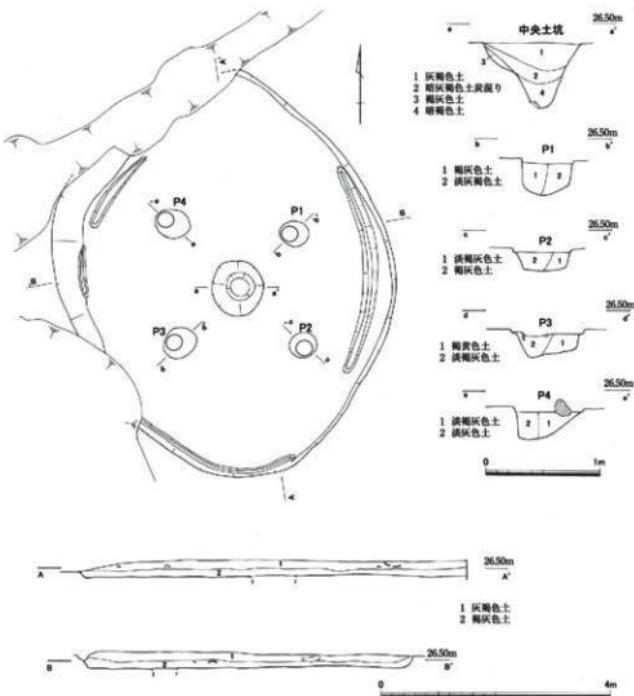


図26 SB04平面・断面図

調査区の北西隅に位置する堅穴建物で南北7.3m以上、東西4.4m以上、深さ10cmのやや歪な円形のプランをもつ堅穴建物である。西側半分は調査区外に拡がる。

中央部東寄りの部分に一辺70cm、深さ70cmで炭層を含む隅丸方形の土坑があり、その外を北から東側に幅30~40cm高さ5~10cmの土手状の遺構が囲んでいる。表面は赤変した部分が認められ焼跡であったと思われる。主柱穴は北側で2基検出できたものの、他は攪乱と調査区外にあたるため確認できなかった。出土遺物から弥生時代中期（畿内第IV様式）に属すると考えられる。

出土遺物

出土遺物は、壺（239）、甕（238）、鉢（237）などがある。

239は、長頸壺で口縁に幅の広い凹線状のナデを施し、端部を摘み内傾させる。238の甕はタタキの後ハケ調整をおこなう。237は小型の鉢で口縁部に凹線文内面にハケ調整をおこなう。

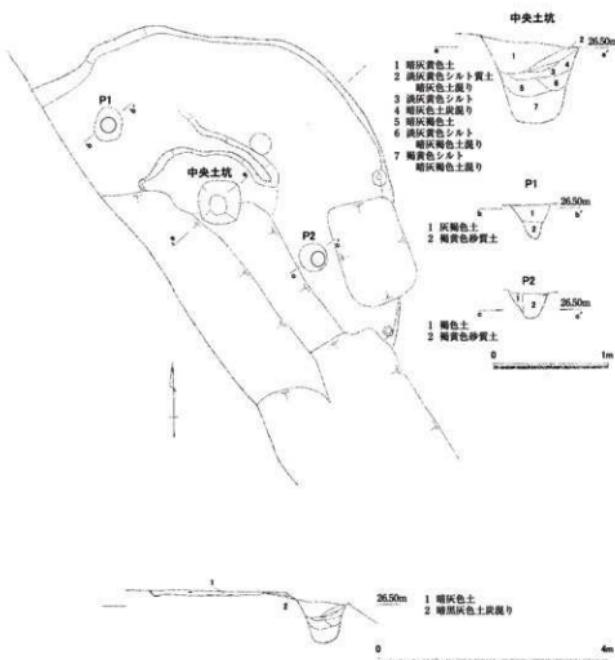


図27 SB05平面・断面図

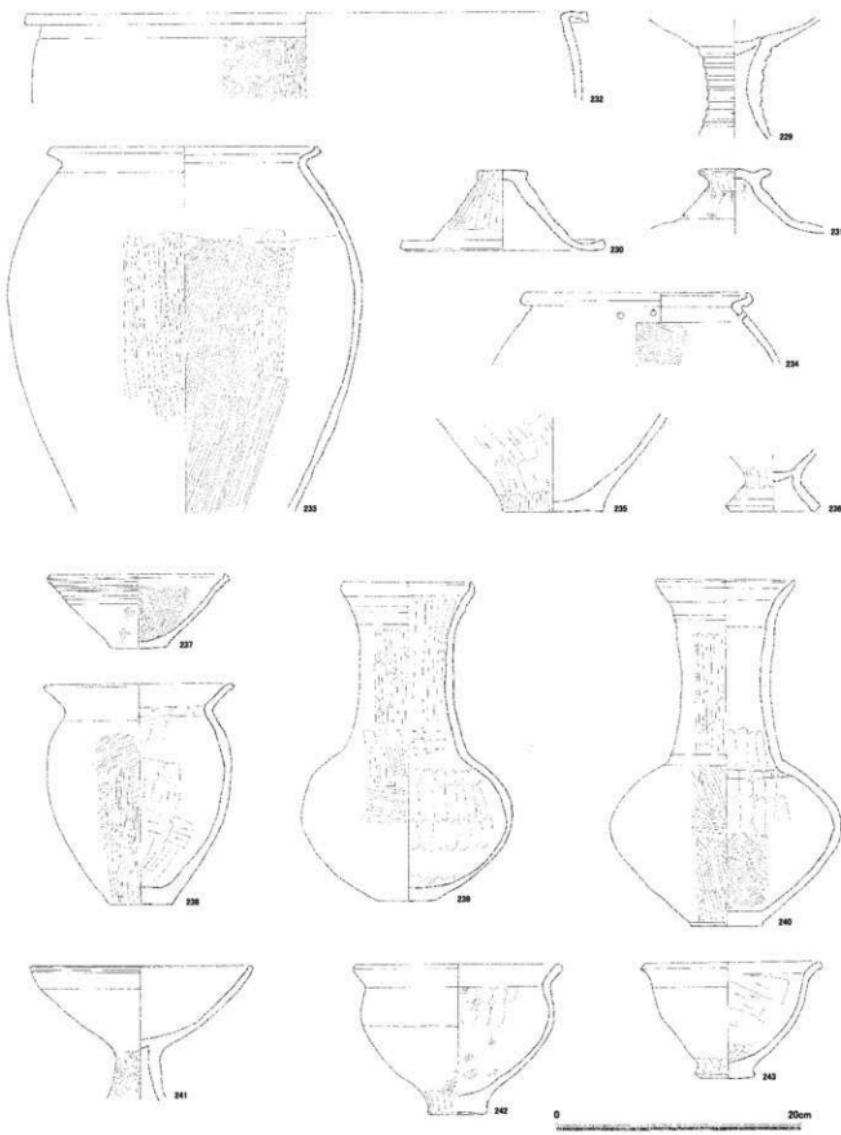


図28 SB04・05 SX20出土遺物

SX20

SB05の東から北側に重なって上層より切り込む竪穴建物状の落込みを検出した。北東部の掘形部周辺に比較的良好な土器群がみられるものの平面形は不明瞭で、柱穴等は確認できなかった。

出土遺物

出土遺物は、壺(240)、高杯(241・245)、器台(244)、鉢(242・243)などがある。240は、長頸壺で口縁に幅の広い凹線状のナデを施す。242の鉢は底部にタタキの痕を残す。

243の器台は、外面をハケ調整し下半に2段の透かし穴を穿つ。241は椀形の高杯で脚部をハケ調整している。242は有稜の高杯である。

SX21

SB05の中央～西部を切る掘り込みでさらに調査区外西方に拡がる。検出部分で南北7.0m、東西1.8m、深さ60cmを測る。埋土には、シルトが多く含まれる層がみられた。

古墳時代の須恵器高杯の破片が出土している。

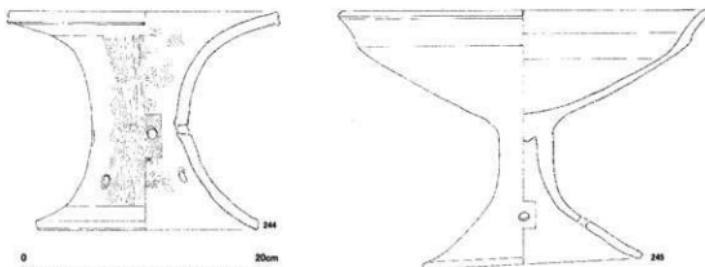


図29 SX20出土遺物

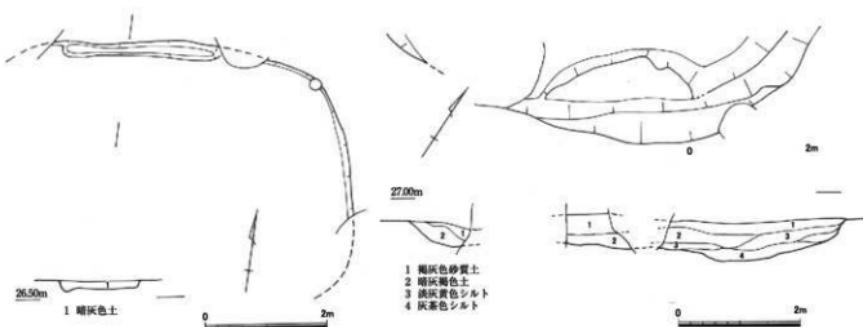


図30 SX20平面・断面図

図31 SX21平面・断面図

流路 1	調査区の西側を東に膨らむ弧状をえがきながら南西へ流れる流路（土石流）である。幅0.4～0.6mほどである。中ほどで幅2.5mほどに広がった淀みのような部分がみられる。深さ20～45cmで砂～粗砂を埋土とする。 この淀みの部分で古墳時代の須恵器などの遺物が出土した。
出土遺物	須恵器の杯身が2点（246・247）出土している。古墳時代後期（TK10型式）の時期と考えられる。他に広口壺（248）や細片で図化できなかったが土師器の高杯なども出土している。
流路 2・5	調査区の中央～南部を断続的に流れる流路（土石流）である。幅0.3～1.5m、深さ20～45cmで砂～粗砂を埋土とする。また流路5は、SB01を切っている。 肩が部分的にオーバーハングしたり、底部に極端に凹凸がみられたりしている。一時的にかなり急激な流れをもって埋まったようである。中ほどで途切れで検出されているものの流路2と流路5は、流れの方向や埋土の状況、含まれる遺物の状況などから同じ一本の流れである可能性が高いと考えられる。 弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物が多く出土した。 遺物の出土状況から、投棄されたようなものでなく土石流状の周辺に存在していた遺構を削った際に巻き込んだ遺物と考えられる。
出土遺物	流路2からは土師器の壺（249）や甕（250・251）などが出土している。 また流路5からは、弥生土器は壺（252・253・255・259・260）、甕（254・256・262）、鉢（261）や、高杯（257）などが出土している。また図化できなかったが流路2と同様に土師器の破片も含まれている。 252の広口壺は、垂下した口縁部に竹管文を巡らす。259は、小型の壺ないし甕と考えられる。底部付近にタタキの痕を残す。254の甕は、外面をタタキ調整、内面はケズリ調整を施す。258の甕は細長い器形で、外面にはハケ調整、内面にはケズリによる調整がみられる。262の甕は、外面にはタタキが施されている。 262の鉢は、内外面ともハケ調整がみられる。257の高杯は、ハケ調整で基部に4箇所の透かし穴を穿つ。この他サヌカイト製の石鎌も出土している。（写真図版 301・302）
流路 3	調査区の北西隅をかすめるように流れる幅0.6～0.8m、深さ40cm、断面形はやや開くV字状の流路である。埋土には、砂～礫が多く含まれている。 弥生土器はタタキのみられる甕や有稜高杯などが出土している。いずれも細片で図化できなかった。
流路 4	調査区の北の突出部を東西に流れる、幅1.0～1.4mの流路である。同質の砂質土が堆積することから土石流のような短期間の流れと考えられる。 弥生土器が出土しているが土師器と思われる細片も含まれる。
流路 6	調査区の北の突出部を流路4の北側を沿うように東西に流れる、幅1.0～1.4m、深さ50cmの流路である。底面は安定せず深く抉られたような部分がみられる。
出土遺物	壺（263・266）や甕（264・265）などが出土している。 263の広口壺は、口縁部に3連単位の竹管文を巡らし、体部下半から底部にかけてタタキの痕を留める。264の甕は、外面をタタキ調整した後に体部下半から底部にかけて板ナデを施す。

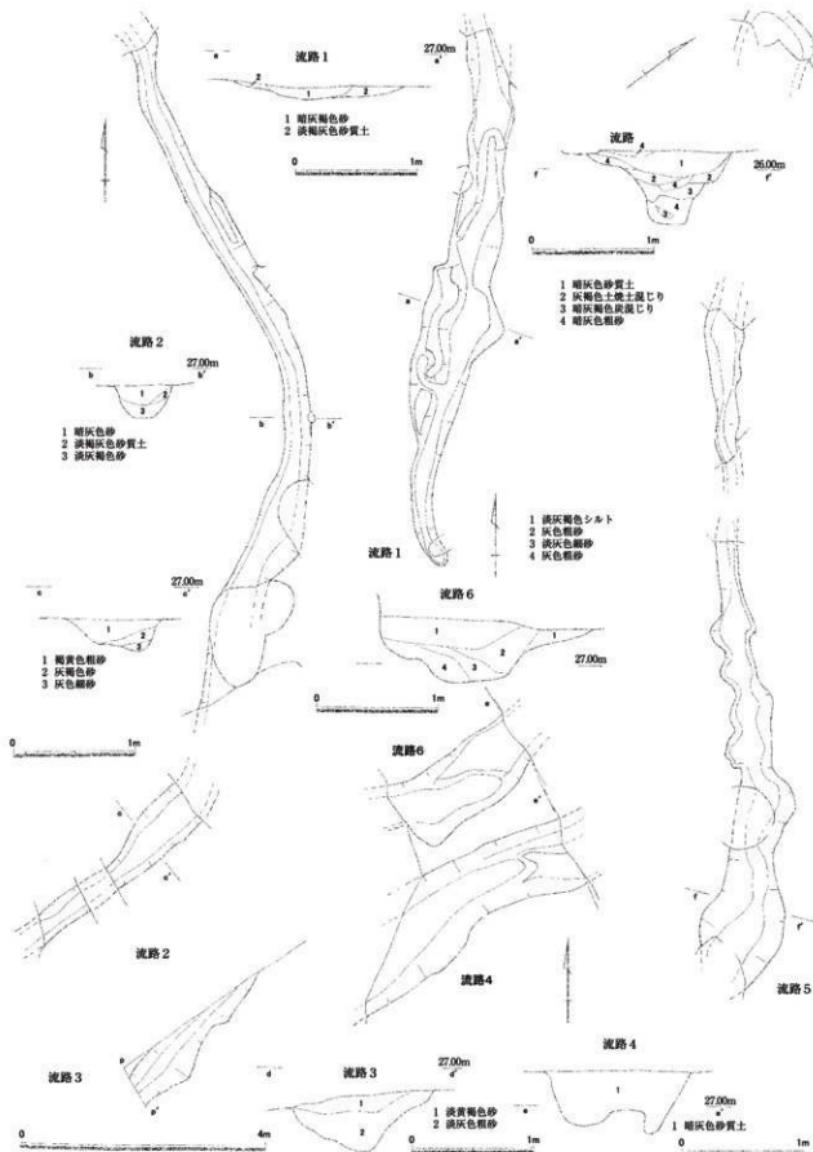


図32 流路1・2・3・4・5平面・断面図

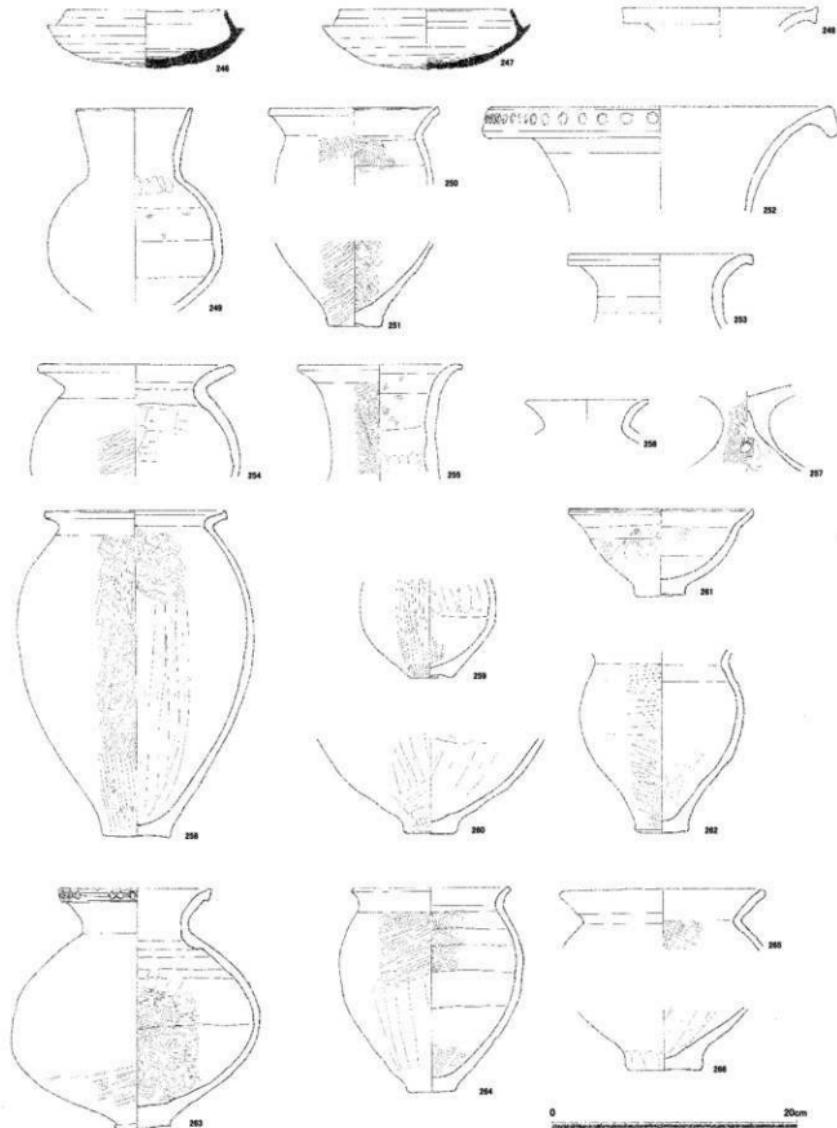


図33 流路1・2・5・6出土遺物

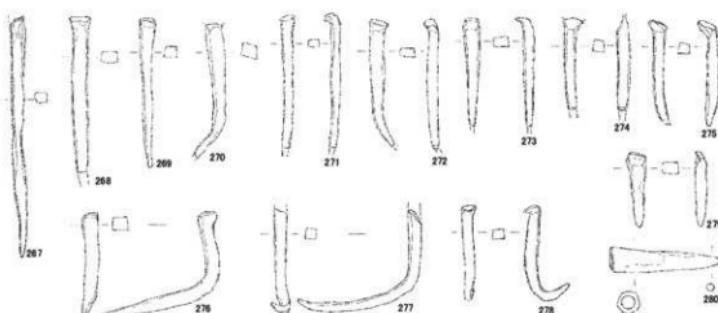
第3節 出土金属製品・金属器生産関連遺物

今回出土した遺物のうち、金属製品及び金属生産関連遺物について記す。出土点数は総数84点を数え、内訳は鉄製品が71点、金属器生産関連遺物として13点の鉱滓がある。

出土品の特徴としては、鉄釘がその大多数を占めていることである。鉄釘はいずれも角釘で、腐食により頭部を欠損するものが多いが、ほとんどが頭巻き釘であると考えられる。これらのうち、平安時代後期の構造より出土した遺物の概要を以下の表にまとめる。

取り上げ番号	遺物名	出土遺構	報告番号	法量 (mm)			取り上げ番号	遺物名	出土遺構	報告番号	法量 (mm)		
				長さ	頭幅	身幅					長さ	頭幅	身幅
R-011-1-1	鉄釘	SD01東側	267	100.4~	—	5	R-188	鉄釘	SP02	33.5~	—	5	
R-011-1-2	鉄釘	SD01東側	268	64.1~	9.6	6.1	R-215	鉄釘	SP83	24.2~	—	4	
R-011-1-3	鉄釘	SD01東側	269	61.8	6.9	4.9	R-221	鉄釘	SD02(鉄屑道)	47.2	6.4	4	
R-011-1-4	鉄釘	SD01東側	271	55.8~	6.3	3.9	R-228	鉄釘	SP94	41.8~	—	5.7	
R-011-1-5	鉄釘	SD01東側	274	54~	—	5.3	R-298	鉄釘	SD02(炭化物層)	87.6	6.5	4.9	
R-011-1-6	鉄釘	SD01東側	280	49.1~	—	5.2	R-360	鉄釘	SP88	21.3~	—	5.5	
R-011-1-7	鉄製品	SD01東側	280	45.2	輪10.5	—	R-430	鉄釘	SP01	29.8~	—	4	
R-011-1-8	鉄釘	SD01東側	278	40.5~	5.8	3.6	R-460	鐵滓	SP108	38.9	幅22 厚さ13.9		
R-011-1-9	鉄釘	SD01東側	279	31.4	8.7	5.8	R-461	鉄釘	SP112	42.7~	4.8~	4	
R-011-1-10	鉄釘	SD01東側	293	29.4~	—	5.6	R-464	鉄釘	SP133	46.0~	6.5	2.8	
R-011-2-1	鉄釘	SD01西側	277	61~	—	4.9	R-553-1	鉄釘	SD01	31.8~	—	5.2	
R-011-2-2	鉄釘	SD01西側	276	65.4~	7.4~	6.2	R-553-2	鉄釘	SD01	34.8~	6.2	4	
R-011-2-3	鉄釘	SD01西側	270	55.8~	7.2~	6.1	R-553-3	鉄釘	SD01	34.1~	—	4.4	
R-011-2-4	鉄釘	SD01西側	265	56.5~	—	3.7	R-553-4	鉄釘	SD01	34.3~	5.7	3.6	
R-011-2-5	鉄釘	SD01西側	272	53.7~	7.8	5	R-553-5	鉄釘	SD01	31.7~	—	4.4	
R-011-2-6	鉄釘	SD01西側	266	46.8~	—	4.3	R-553-6	鉄釘	SD01	29.1~	—	3.1	
R-011-2-7	鉄釘	SD01西側	273	45.7~	6.0~	5.4	R-553-7	鉄釘	SD01	22.9~	—	4.9	
R-011-2-8	鉄釘	SD01西側	264	41.4~	4.3	4.2	R-553-8	鉄釘	SD01	25.8~	—	5.2	
R-011-2-9	鉄釘	SD01西側	274	38.5~	—	7.8~	R-553-9	鉄釘	SD01	22.14~	4.4	2.2	
R-011-2-10	鉄釘	SD01西側	271	31.5~	—	5.5	R-553-10	鉄釘	SD01	23.3~	—	3.8	
R-031	鉄釘	SD02	45.2~	—	7.1	R-553-11	鉄釘	SD01	23.6~	9	5.8		
R-045	鉄釘	SE02	27.6~	—	4.8	R-553-12	鉄釘	SD01	20.8~	—	3.9		
R-046-1	鉄釘	SE02	63.4~	—	4.4	R-553-13	鉄釘	SD01	24.4~	4.5	2.8		
R-046-2	鉄釘	SE02	57.5~	7.9	4.3	R-553-14	鉄釘	SD01	26.4~	—	2.7		
R-046-3	鉄板	SE02	36.1~	輪17.9~	厚さ1.6	R-553-15	鉄釘	SD01	20.2~	3.6	2.5		
R-046-4	鐵滓	SE02	39.4	輪26.9	厚さ18.0	R-553-16	鉄釘	SD01	26.7~	輪22.9~	厚さ0.7		
R-049-1	鉄釘	SE01	31.5~	—	6	R-554-1	鉄釘	SD02(炭化物層)	45.8~	6.3~	4.3		
R-049-2	鉄釘	SE01	19.8~	—	3.5	R-554-2	鉄釘	SD02(炭化物層)	38.2~	3.2~	2		
R-080	鉄釘	SD01	275	44	7.3	4.1	R-554-3	鉄釘	SD02(炭化物層)	28.6~	3.3	2.3	
R-087-1	鉄釘	SE02	43.1~	—	4.5	R-554-4	鉄釘	SD02(炭化物層)	21.1~	—	3.3		
R-087-2	鉄釘	SE02	60.7~	7.1~	7.3	R-554-5	鉄釘	SD02(炭化物層)	19.9~	—	3.3		
R-105	鉄釘	SE02	34.2	4.4~	—	R-554-6	鉄釘	SD02(炭化物層)	19.5~	—	5.3		
R-151	鉄釘	SE02	57.3	40.4	厚さ17.7	R-554-7	鉄釘	SD02(炭化物層)	15.1~	—	3.9~		
R-174	鉄釘	SD01	39.7~	—	4.2	R-554-8	鉄釘	SD02(炭化物層)	14.4~	4.5	2.3		

表1 出土金属製品・金属器生産関連遺物一覧



第34図 SD01出土鉄製品

第4節 SE02出土漆製品の保存科学的調査

SE02から出土した黒色塗膜断片（図版4・挿図写真9）は、11の断片（最大の破片で10cm×5cm）に分裂していたものの、湿潤な環境下で埋蔵され遺存していた。これらは薄いシート状を呈し、全体に内湾氣味である。破片は互いに接合点が見出せなかったが、状況からは同一個体であろうと考えられる。以下に調査の結果を記す。

各破片について肉眼及びルーペ（15倍）によって観察した。いずれも不定形断片であり、割れの方向や形状に顕著な傾向は見られない。写真下段3点のように折り畳まれた一端が閉じている破片は端部と考えられる。また写真中段右など製作時、柔軟性を保持していた時に段折りされたと思しき破片もある。それぞれの断片は厚さ0.6～0.9mm前後で、触感は硬く僅かに韌性を保っているものの、脆い。表面は半光沢を持つ黒色でややざらついた印象を受けるが、これは絡み合った纖維が樹脂層に被覆され、表面に微細な凹凸を形成しているためである。破断面の観察（挿図写真10）では、褐色の層を挟んで上下に黒色の層が存在していた。併せて赤外線カメラによる調査を行なったが、墨書等は確認できなかった。

実体顕微鏡によりさらに詳しく表面観察を行なった。纖維は全体に存在しており、走行方向は凡そ一定方向を向いている（挿図写真11）。ただし、布帛のように規則的な織りではなく、不織状態のシートである。絡み合った纖維は樹脂に膠着されているため正確な全長は不明だが、長いものでは1cm以上を測る。纖維方向に一定傾向があることから、和紙であれば「流し漉き法」により製作された可能性が示唆される。黒色樹脂は纖維の凹凸を残す程度の厚みで被覆されている。また纖維の頂部稜線に沿って微細なクラックを生じていることからも、さほど重厚な塗りが施されなかったようである。

2箇所より小片を採取し（S-1・S-3）、エボキシ樹脂に包埋したものを薄く研磨してクロスセクションサンプルを作成、透過光による顕微鏡観察を行なった。結果、基材の上には、外面2層、内面1層のアモルファスな樹脂状物質が比較的均一に施されていることが確認でき（挿図写真12・13）、漆であろうと想定された。この結果は破断面で確認した結果（挿図写真10）とは違っており、部分ごとに漆の塗布状況に差があることが判明した。

挿図写真12は、上が外面、下が内面にあたる、厚さ約0.5～0.6mmの漆塗膜層の横断面写真である。中心付近やや下方に厚さ約0.35mmの黒漆層が横走し、上下をやや明るい褐色の生漆層がはさんでいる。外側の生漆層は厚さ約0.08mm、内側の層は厚さ約0.1mmを測る。

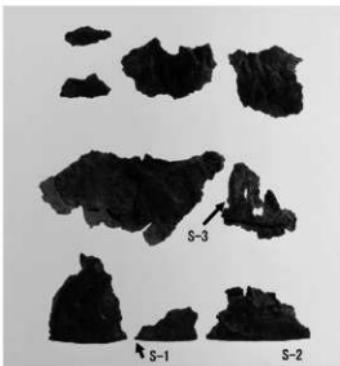
纖維そのものは腐食のため失われているが、漆層に残されたネガティブ像として、纖維の外形が観察できた。挿図写真13は外面の褐色層断面である。纖維はランダムな方向を向いているため、正確に直交断面が観察できたわけではないが、断面形は概して円～楕円形を呈すると捉えられた。観察できた約40個の断面短径を計測すると、平均値が約12μmであった。これは麻・絹・楮・三桺・雁皮・竹・稻藁など、古来使用してきた植物纖維の単纖維と比較しても、スケール的に離船を生じない。纖維断面が円～楕円形で、纖維の長さが1cmを越える和紙の原料とすれば、上記の内、麻・楮などが挙げられる。しかし表面観察では、精製された麻に特徴的である「燃れ」は見られず、楮とされる一群が原材料であった可能性がある。ただしあくまでもネガティブ像の観察結果であるため、確実とは言えない。

以上をまとめると、今回の出土遺物は「黒漆と生漆が塗られた和紙」と考えられる。平安

時代後期における和紙に漆を施した製品には、鳥帽子など服飾品や、膳・椀といった食器具などが挙げられる。また、二次的に漆が付着したものとしては、漆容器の蓋などが知られる。今回の出土品は本来の形状が推定しにくいため、実際の器物としてどのようなものであったか詳細は不明である。しかし塗膜の均質さから見ても、和紙を基材とし、意図的に漆が塗られた製品であった可能性を考えるべきであろう。

(参考文献)

- 2003 大川昭典「浮世絵の紙」『ぶんせき』339
日本分析化学会
- 2006 穴倉佐敏『和紙の歴史 製法と原材料の変遷』
財団法人印刷朝陽会
- 2010 穴倉佐敏「国立歴史民俗博物館蔵 古文書・
古典籍料紙の調査」『国立歴史民俗
博物館研究報告』第160集 国立歴史
民俗博物館
- 2011 穴倉佐敏『必携 古典籍古文書 料紙事典』
八木書店



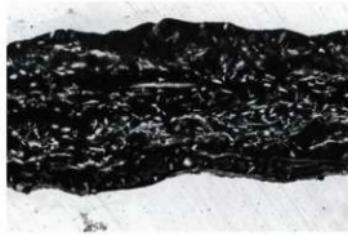
挿図写真9：サンプル採取箇所



挿図写真10：S-2 破断部分実体鏡写真（24倍）



挿図写真11：S-2 内面実体鏡写真（5倍）



挿図写真12：S-2 断面顕微鏡写真（透過光・50倍）



挿図写真13：S-3 断面顕微鏡写真（透過光・100倍）

第4章 自然科学分析

祇園遺跡第14次調査出土木材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに 木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。本報告では、祇園遺跡第14次調査より出土した木製品1点と炭化材10点に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。

2. 試料と方法 試料は、祇園遺跡第14次調査より出土した木製品1点と炭化材10点である。木製品は連歯下駄1点で、時期は12世紀後半～末である。炭化材10点は建築材であり、畿内第IV様式と共に伴する。

方法は、木製品に関しては、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～100倍で観察した。炭化材に関しては、試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～100倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

同定の結果、R-342連歯下駄はヒノキ、№1・№9建築材はシイ属、№2建築材はニレ属、№3・№4建築材はカヤ、№5・№8建築材はコウヤマキ、№6建築材はシイ属、№7建築材はサクランボ属、№10建築材は広葉樹であった。結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に解剖学的特徴を記す。

1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 (№3・№4) 写真2

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅が狭い。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型をあり1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の济州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬であり、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

2) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 (№5・№8) 写真3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行が比較的ゆるやかで晩材部の幅が狭い。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型で1～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑の高木で通常高さ30m、径80cmに達する。材は木

理通直、肌目緻密で強韌であり、耐朽性、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (R-342) 写真 1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行がゆるやかで晩材部の幅が狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型で1~15細胞高である。以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築などに広く用いられる。

4) シイ属 *Castanopsis* ブナ科 (No.6) 写真 4

横断面では、年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材を示す。晩材部に小道管が火炎状に配列する。放射断面では、道管の穿孔が單穿孔で放射組織は平状細胞からなる。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性とともにやや低く、建築、器具などに用いられる。

5) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 (No.2) 写真 5

横断面では、年輪のはじめに中型から大型の道管が1~3列配列する環孔材を示す。孔圈部の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面では、道管の穿孔が單穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。接線断面では、放射組織が同性放射組織型で1~5細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりニレ属に同定される。ニレ属は北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木であり、ハルニレ、オヒヨウなどがある。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

6) サクラ属 *Prunus* バラ科 (No.7) 写真 6

横断面では、小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材を示す。道管の径は材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面では、道管の穿孔が單穿孔で道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。接線断面では、放射組織が異性放射組織型で1~4細胞幅である。以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属にはヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

7) 広葉樹 broad-leaved tree (No.10)

横断面では、部分的ではあるが道管が存在する。放射断面では、道管と放射組織の存在が認められる。接線断面では、道管と放射組織が存在する。以上の形質より広葉樹に同定される。本試料は小片で保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であることから、広葉樹の同定にとどまる。

4. 所見

連歛下駄はヒノキであったが、12世紀後半～末でヒノキが多用される時期であり、多い選材である。建築材（炭化材）は、シイ属3点、カヤ2点、コウヤマキ2点、ニレ属1点、サクラ属1点、広葉樹1点であるが、大材がとれる樹種ばかりである。弥生時代の建築材は大材がとれる多様な広葉樹が用いられるのが特徴であり、本遺跡においても同様の特徴を示す。

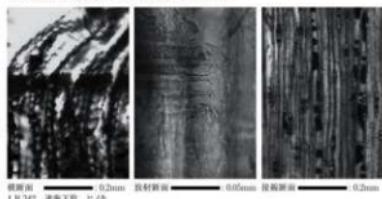
参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
 烏地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296.
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

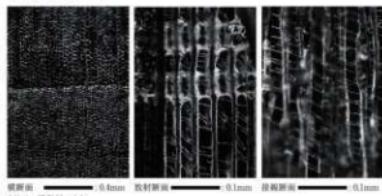
番号	遺物名	出土遺構	時期	備考	結果（学名／和名）	
R-342	連歛下駄	SE02	12世紀後半～末	木材	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
No. 1	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Castanopsis</i>	シイ属
No. 2	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Ulmus</i>	ニレ属
No. 3	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Torreya mucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
No. 4	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Torreya mucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
No. 5	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
No. 6	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Castanopsis</i>	シイ属
No. 7	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Prunus</i>	サクラ属
No. 8	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
No. 9	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	<i>Castanopsis</i>	シイ属
No.10	建築材	SB01	畿内第IV様式	炭化材	broad-leaved tree	広葉樹

表2 祇園遺跡第14次調査における樹種同定結果

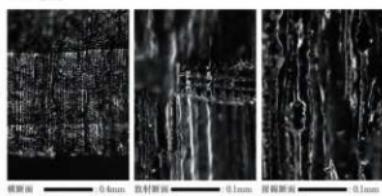
祇園道路第14次調査の木材及び炭化材 Ⅰ



1.3.42 建築下部 ピノ木
被削面 0.2mm 放射断面 0.1mm 被削断面 0.2mm

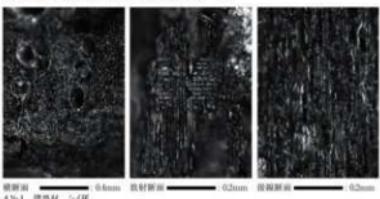


2.3.4 建築材 カヤ
被削面 0.4mm 放射断面 0.1mm 被削断面 0.1mm

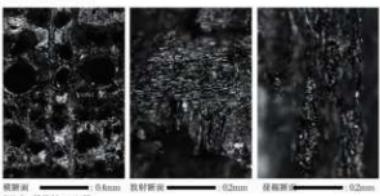


3.3.5 建築材 コヤマキ
被削面 0.4mm 放射断面 0.1mm 被削断面 0.1mm

祇園道路第14次調査の木材及び炭化材 Ⅱ



4.3.1 建築材 シイ
被削面 0.4mm 放射断面 0.2mm 被削断面 0.2mm



5.3.2 建築材 ニレ
被削面 0.4mm 放射断面 0.2mm 被削断面 0.2mm



6.3.7 建築材 ナラ
被削面 0.4mm 放射断面 0.2mm 被削断面 0.2mm

挿図写真14 木材及び炭化材顕微鏡写真

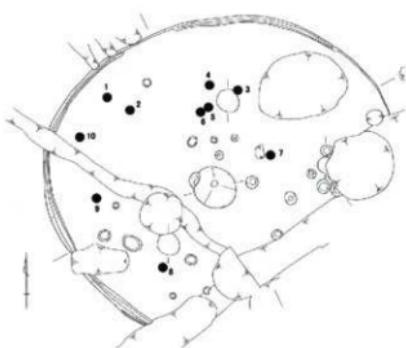
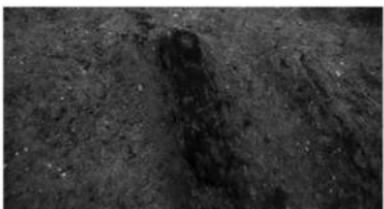


図35. SB01サンプリング位置図



挿図写真15 サンプルNo.1



挿図写真16 サンプルNo.8

第5章 まとめ

最後に、今回の調査における成果について、時代順に確認してあわせて周辺の調査結果と比較して本書のまとめとしたい。

縄文時代

第1次調査などにおいては、縄文時代の遺物を含む流路などが確認されているが、今回の調査においては、遺構をはじめとして明確に縄文時代と判別できる土器は出土していない。わずかに縄文時代と思われる小型の石鏃が、後世の遺構より2点出土しているだけである。(写真図版30 284・285)

弥生時代

調査地の南半部においては、確かなものだけで弥生時代中期（畿内第IV様式）の竪穴建物3棟が存在する。本調査地の北側の第7・12調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての竪穴建物が確認され5次調査において検出された竪穴建物が中期後半の可能性が示されているものの、明確な竪穴建物の確認は今回初めてである。一帯には、比較的長期間持続的に弥生時代の集落が存在していたと考えられる。

良好な出土遺物やSB03でみられた「1〇（いちまる）土坑」などは、当地域における播磨などの影響を考える上で興味深い。

また弥生時代後期の遺物を含む流路3・4・6については、急激な流れによって短期間に堆積した様子がみられる。

古墳時代

古墳時代の遺構としては、古墳時代前期の竪穴建物SB02と流路2・5、古墳時代後期の流路1がある。SB02については、前述の第7・12次調査の竪穴建物と同時期かやや新しいと考えられ、居住域の拡がりを示す資料といえよう。

平安時代

今回の調査において確認された平安時代後期の遺構群は、掘立柱建物、溝、柵列、井戸などがある。

建物については、遺構埋土や遺物包含層などからも瓦片が殆ど出土していない⁽¹⁾ことから桧皮や板葺きであった可能性が高い。南端で確認されたSD01については、規模や途中で途切れる形状などから、邸宅地を区切るものではなく鎌倉や伊豆の北条氏邸宅でみつかっている邸宅内の施設などを区切る区画溝と考えられる⁽²⁾。この場合、邸宅地はさらに南に拡がるものと考えられる。また建物群と区画溝1の間に存在している遺構の希薄な部分についても、宅地内のなんらかの目的をもった空地であった可能性がある。

これらの建物群とSD01は、N58°～59°Eの方向で築かれている。今回の調査区の北西約100mにある第2次・5次調査地は、園地遺構などが確認され「福原京」の中枢部と考えられる地区であるが、この園池の州浜の堤の方向はN52°Eであり基準方向に違いがある。また、近接する楠・荒田町遺跡第2次調査や第46次調査の大規模な塹の方向N70°Eとも大きく違っている。

第2次・5次調査の園池の堤方向については、楠・荒田町遺跡第11次調査の11～12世紀の建物や柵列をはじめ松野遺跡や二葉町遺跡の同時期の建物などもN50°E前後をとるものがあり、古代山陽道を基準としていると考えられていることから、この基準を意識したものとも考えられる。また楠・荒田町遺跡の塹の方向については、一帯に規則的に確認されることから貴族の邸宅の区割りなど、ある時期の都市計画に法ったものとされる。

今回の調査において確認された建物群の基準方向は、周辺一帯にみとめられる明治初め頃

の地図に残る地割りにほぼ沿っているようであり、地形に制約された結果生じた基準方向であると考えられが、時期については今後の検討課題である。

また建物群に先行するSE02からは、多量の遺物が出土した。器種は中国製の青磁や白磁、瓦器椀・皿および土師器の皿・小皿であり⁽³⁾、恵器の椀や鉢、土師器の甕などは殆どみられず日常生活に伴う器種構成とはかけ離れる。おそらく井戸の廃棄（埋め戻し）の祭祀による土器と考えられる。またSE02およびSE03では構築材が入念に抜き取られたようで、材の再利用が徹底されていたようである。

邸宅の存続時期については、建物の柱穴からは時期を特定できる遺物は出土しなかったものの、建物に先行する井戸（SE02）から宅地の造成による埋め戻しの時期を示すと考えられる遺物が出土し、また建物に伴う区画溝（SD01）からも焼土など建物の廃絶を窺わせる出土状況で遺物が確認されていることから、ある程度の時期幅の決定が可能となった。この結果、SE02とSD01の遺物の時期差はほとんど認められないことから、概ね12世紀後半から12世紀末の比較的短い期間に存在したものと考えられる。

この時期は、おりしも平清盛による福原への退避から平家の遷都前後にあたる。このように短期間に規格された土地利用と大規模な邸宅の建造は、平清盛を中心とする平家一門の政権による強い意思によって一帯が急速に開発されていった様子が窺える。

また区画溝や井戸からの出土遺物については、中国製の青磁や白磁をはじめ京都の影響を受けた土師器などもみられるものの、播磨や吉備、瀬戸内地方の影響をうけた回転台を用いた土師器や高台付きの椀などもある程度の割合でみられる。

これらのことから、今回の調査で確認された邸宅の主は、平家一門を支えた在地の有力者で西国に経済基盤などの結びつきをもった人物とも考えられる。

(1) 確実に平安時代の瓦と確認できるものはSE02から数点出土したのみ。うち1点は軒丸瓦（写真図版26-300）

(2) 銚柄俊夫氏の御教示による。

(3) 現在の整理で土師器の小皿112点、中皿102点（1/2以上の個体）が確認されている。



挿図写真16 紙園遺跡遠景
稿・荒田町遺跡 兵庫津遺跡を望む